

第16回 関東地区小学校社会科研究協議会研究大会

茨城大会報告

大会主題

「かかわり」を大切にして、「みえる」「わかる」
子どもが育つ社会科学習の創造

期 日 平成24年1月25日（水）

会 場 全体会会場・講演会場
ホテルレイクビュー水戸

公開授業・分科会会場
第1会場 水戸市立浜田小学校
第2会場 水戸市立常磐小学校
第3会場 水戸市立緑岡小学校

主 催 関東地区小学校社会科研究協議会
茨城県教育研究会社会科教育研究部

後 援	茨城県教育委員会	茨城県学校長会
	茨城県教育会	茨城県教育研究会
	水戸市教育委員会	水戸市
	水戸市学校長会	水戸市教育会
	(財)日本教育公務員弘済会	

目 次

1	あいさつ			
	関東地区小学校社会科学研究協議会会長	飯島 尚之	-----	1
	第16回関東地区小学校社会科学研究協議会			
	茨城大会実行委員長	北澤 正	-----	2
2	大会要項	-----		3
3	大会基調	-----		5
4	指導講評			
	茨城県教育庁義務教育課指導主事	田辺 光博 先生	-----	7
5	記念講演			
	國學院大學人間開発学部教授	安野 功 先生	-----	9
6	第1会場 水戸市立浜田小学校	-----		1 5
	授業校から	-----		1 6
	分科会記録	-----		1 7
7	第2会場 水戸市立常磐小学校	-----		2 5
	授業校から	-----		2 6
	分科会記録	-----		2 7
8	第3会場 水戸市立緑岡小学校	-----		3 5
	授業校から	-----		3 6
	分科会記録	-----		3 7
9	大会運営記録	-----		4 5
10	大会役員一覧	-----		5 1
	あとがき			



お 礼 の こ と ば

関東地区小学校社会科学研究協議会
会 長 飯 島 尚 之

第16回関東地区小学校社会科教育研究協議会研究大会茨城大会が、関東1都6県の社会科教育に携わっておられる約700名余りの先生方をお迎えし、大きな成果を収めて終了できましたことは、私どもにとりましてこの上もない喜びであります。これも本大会を開催するに当たって温かいご指導ご支援を賜りました茨城県教育委員会・茨城県学校長会・茨城県教育会・茨城県教育研究会・水戸市・水戸市教育委員会・水戸市学校長会・水戸市教育会・日本教育公務員弘済会、さらには、運営に携わってくださった大会関係者すべての皆様のおかげと厚く感謝申し上げます。

さて、本大会は、新学習指導要領の完全実施を見据え、4年前から県組織を挙げて継続研究を続けて参りました。このように県の総力を結集することができたのは、主題の検討の段階から國學院大學人間開発学部教授安野功先生（当時は文部科学省教科調査官）の指導を仰ぐことができたという幸運があったからです。安野先生に4年間一貫してご指導を仰ぐことができたので、理論と実践に一貫性のある研究大会となりました。さらに、研究会当日は、「関小社茨城大会の意義とこれからの社会科教育」について、具体的にお話いただき、多くのご教示を賜りました。安野功先生に改めて感謝の意を表します。ありがとうございました。

また、安野先生のご指導の下、『「みえる」「わかる」子どもの姿の構造図』を作成し参加者各位にお配りできました。この冊子も本大会の大きな成果の一つととらえております。大会主題である『「かかわり」を大切に、「みえる」「わかる」子どもが育つ社会科学習の創造』を具現化するために、具体的にどうすればよいかを構造的に示しております。関東地区のすべての先生方にご活用いただければ幸いです。

さらに本報告書には、この構造図を元に自校化し、水戸ならではの教材を開発して授業提案をしてくださいました水戸市立浜田小学校・常磐小学校・緑岡小学校の皆様の努力の結晶である実践記録が載っています。「備前堀」「弘道館や斉昭」「千波湖」「納豆工場」「笠間焼」などなど、水戸ならではの教材を開発して授業化していただいた三校の先生方のご努力に、改めて感謝申し上げます。さらに学年別課題研究会でご発表いただきました提案者・司会者・記録者はじめ運営にかかわられた皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

最後になりましたが、当日指導講評をいただきました茨城県教育庁義務教育課指導主事田辺光博先生はじめ、茨城県教育委員会、実際の日々の授業をご指導くださいました茨城県水戸教育事務所・水戸市総合教育研究所をはじめとする各指導主事の先生方、社会科担当の先生方、大会運営に当たられました実行委員や事務局の先生方に厚く御礼申し上げます。

関東地区小学校社会科学研究協議会のますますの発展を祈念し、お礼の言葉に代えさせていただきます。



茨 城 大 会 を 終 え て

第 1 6 回 関 東 地 区 小 学 校 社 会 科 研 究 協 議 会 研 究 大 会

茨城大会実行委員長 北 澤 正

筑波山にも白い雪がうっすらつもり、一年の中で最も厳しい寒さの時季に、國學院大學教授安野功様、全国小学校社会科研究協議会会長久保田福美様、茨城県教育庁義務教育課長本多清峰様、水戸市教育委員会教育長鯨岡武様、茨城県教育研究会会長砂川洋一様をはじめ多くのご来賓の方々、並びに県内はもちろん関東各都県からの多くの先生方が、常陸の国、茨城県水戸市にお越しいただき、本大会が開催できましたことに感謝申し上げます。

昨年(2011年)の3月11日の東日本大震災におきまして、被害等になりました皆様に心からお見舞い申し上げます。水戸市でも弘道館等を含む歴史的文化遺産に多大なる被害を受けました。しかし、偕楽園の好文亭が復旧工事を終え、今年(2012年)の2月7日から一般公開を再開することができました。本大会も、開催日時や全体会場の変更など参加者並びに関係者、関係機関に多大なるご迷惑をおかけしたにもかかわらず、約700名を超える参加者を得ることができ、第16回関東地区小学校社会科研究協議会茨城大会が盛会のうちに終了できました。ご協力・ご理解をいただいた皆様に心から御礼申し上げます。

授業公開3会場(浜田小・常磐小・緑岡小)の子どもたちは、教室からあふれんばかりの多数の参観者に驚きと不安を感じながらも、意欲的に学び合い、集中して学習に取り組んでいました。本大会が目指した「かかわり」を大切にしたい「みえる」「わかる」子どもの姿が、現れていたのではないのでしょうか。

全国学力・学習状況調査や国際的なPIISA調査(学習到達度調査)の結果から、子どもたちは読解力と記述力が弱い、また、自ら学んでいく姿勢、自分なりの問いやこだわりを持ち、問題を解決していこうとする能力に欠けていることがわかりました。

新学習指導要領では、そうした現状を踏まえて、社会がどのように変化しても自分の考えで判断し、問題を解決していく力、そして、自らを律しつつ人と協調し、たくましく生きる力の育成をねらいとしています。基礎的な知識と技能を身につけ、思考力・判断力・表現力を育てるための学習こそが大切です。まさに、社会科学習は、新学習指導要領が目指している能力・資質の育成に深くかかわりのある教科と言えます。

このような状況を踏まえて、茨城大会は『「かかわり」を大切にしたい「みえる」「わかる」子どもが育つ社会科学習の創造』を研究主題に掲げ、「思考力・判断力・表現力を連続させながら活用し、学習している子どもの姿」の実現を目指して研究を行ってきました。主な成果として

- 子どもの姿の構造図を作成し指導を展開したことで「見える」「分かる」から「みえる」「わかる」へと、社会認識を広げ、深めたりする場面が見られた。
- 地域の素材や人材とのかかわり(「学習の対象」との「かかわり」)を積極的に取り入れた結果、社会的事象に関心をもって進んでかかわり、社会を自分事としてとらえ考え、判断し、表現する姿が見られるようになった。

以上、多くの成果を上げることができました。

茨城県社会科研究会は、一時間一時間の授業にこだわり「授業が命」を信条に、子どもにとって、「社会科学習は楽しいな!」と実感できることを念頭に研修しております。今回の大会で各都県の先生方から寄せられた貴重な研究課題やご意見・ご指導を参考に研究し、邁進していきたいと考えております。

結びに、茨城大会の開催にあたり、長きにわたりご指導・ご鞭撻を賜りました國學院大學教授安野功先生、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会はじめ多くの方々から終始温かいご支援等をいただきありがとうございました。更に、本大会に向けて多大なるご配慮とご尽力をいただきました水戸市立浜田小学校、常磐小学校、緑岡小学校の先生方、そして、本大会運営に身を挺してあたられました役員・関係者の皆様に心より感謝礼申し上げます。本大会で学んだことを生かし、今後とも一層努力をいたすことをお約束して、茨城大会のお礼のことばといたします。

大会要項

1 日程

9:00	9:20	10:45	11:45	13:20	14:05	14:20	15:05	15:15	16:25
受付	全体会 開会行事	全体会 基調提案 指導講評	記念講演	移動 昼食 理事会 11:55～12:35	公開授業	休憩	分科会 研究年別授業	休憩	研究年別課題 閉会行事
全体会会場				各分科会会場					

2 全体会 ホテルレイクビュー水戸 (9:20～10:40)

〒310-0015 茨城県水戸市宮町1丁目6-1 Tel 029-224-2727

(1) 開会のことば

(2) 挨拶

関東地区小学校社会科研究協議会会長
茨城大会実行委員長
水戸市教育委員会教育長

飯島 尚之
北澤 正
鯨岡 武 様

(3) 来賓祝辞

(4) 来賓・講師紹介

(5) 大会役員感謝状贈呈

(6) 大会基調提案

茨城大会実行委員会研究部
茨城県教育庁義務教育課指導主事
東京都小学校社会科研究協議会

中島 隆行
田辺 光博 先生
小泉 与吉

(7) 指導講評

(8) 次回開催地挨拶

(9) 閉会のことば

3 記念講演 (10:45～11:45)

(演題) 「関小社茨城大会の意義とこれからの社会科教育」

國學院大學 人間開発学部教授 安野 功 先生

4 公開授業・分科会

第1会場 水戸市立浜田小学校

〒310-0812 茨城県水戸市浜田1丁目1-1 Tel 029-224-2717

公開授業・学年別授業研究会 (13:20～15:05)

学級	授業者	単元名	司会者	記録者
3年3組	江原 輝子	かわってきた人々の暮らし ～古い道具と昔の暮らし～	常陸大宮市立大賀小学校 教諭 大津 香	古河市立古河第四小学校 教諭 生沼 芳弘
4年2組	田村 雅子	備前堀をつくった伊奈忠次	龍ヶ崎市立大宮小学校 教諭 宮本 一利	古河市立小堤小学校 教諭 谷畑 威至
5年2組	桑原 和彦	社会を変える情報	北茨城市立中郷第一小学校 教諭 塩野 淳子	古河市立仁連小学校 教諭 杉山 史康
6年2組	三浦 広興	わたしたちの願いを実現する政治	ひたちなか市立前渡小学校 教諭 嶋崎 光男	古河市立下辺見小学校 教諭 坪山 昌則

学年別課題研究会 (15:15～16:25)

学年	提案者	司会者	助言者	記録者
3年	栃木 足利市立筑波小学校 教諭 柏瀬 順一	足利市立山辺小学校 教諭 池山 勝幸	足利市教育委員会 指導主事 柏瀬 和彦	足利市立久野小学校 教諭 増田 香代子
4年	埼玉 川口市立本町小学校 教諭 内山 達也	上尾市立尾山台小学校 教頭 山田 浩一	川口市立根岸小学校 校長 清水 健治	川口市立鳩ヶ谷小学校 教諭 北川 智之
5年	茨城 日立市立台原中学校 教諭 杉澤 季展	常陸太田市立山田小学校 教諭 和田 秀彦	日立市教育委員会 指導主事 高橋 重樹	高萩市立君田小学校 教諭 富山 明子
6年	茨城 ひたちなか市立外野小学校 教諭 松本 恵	ひたちなか市立前渡小学校 教諭 嶋崎 光男	ひたちなか市教育委員会 指導主事 関口 拓生	ひたちなか市立那珂湊 第二小学校 教諭 押野 恭子

第2会場 水戸市立常磐小学校

〒310-0044 茨城県水戸市西原1丁目3-12 Tel 029-224-2272
公開授業・学年別授業研究会（13：20～15：05）

学 級	授 業 者	単 元 名	司会者	記録者
3年1組	奥川 芳子	古い道具と昔の暮らし	茨城町立石崎小学校 教諭 瀬谷 誠	坂東市立生子菅小学校 教諭 関根 賢一
4年3組	宮田 直実	弘道館をつくった「徳川斉昭」	行方市立大和第三小学校 教諭 宮内 康夫	坂東市立長須小学校 教諭 茂呂 大樹
5年2組	山口 恵子	わたしたちの生活と環境 ～わたしたちの生活と千波湖～	北茨城市立明德小学校 教諭 花園 隆一	坂東市立弓馬田小学校 教諭 笹田 秀夫
6年2組	平山 智己	わたしたちの生活と政治	稲敷市立阿波小学校 教諭 木村 寿	坂東市立七重小学校 教諭 鶴見 卓彦

学年別課題研究会（15：15～16：25）

学年	提案者		司会者	助言者	記録者
3年	神奈川	横浜市立本郷台小学校 教諭 樋渡 由希恵	横浜市立川和東小学校 教諭 寺岡 徹	横浜市立藤が丘小学校 校長 藤馬 享	横浜市立菊名小学校 教諭 宮野 憲一郎
4年	茨城	神栖市立大野原小学校 教諭 飯田 直樹	鉾田市立巴第一小学校 教諭 岩城 和久	水戸教育事務所 学校教育課長 勝村 登	行方市立玉造西小学校 教諭 飯田 浩彦
5年	東京	世田谷区立松沢小学校 教諭 佐藤 真至 新宿区立四谷小学校 教諭 北中 啓勝	大田区立入新井第二小学校 校長 嶋田 英樹	世田谷区立松原小学校 校長 小林 巧	小平市立小平第六小学校 教諭 櫻井 正義
6年	茨城	稲敷市立古渡小学校 教諭 駒澤 悦郎	稲敷市立あずま南小学校 教諭 星 充	石岡市教育委員会 指導主事 會田 照行	稲敷市立沼里小学校 教諭 松島 正典

第3会場 水戸市立緑岡小学校

〒310-0913 茨城県水戸市見川町2563 Tel 029-241-1923
公開授業・学年別授業研究会（13：20～15：05）

学 級	授 業 者	単 元 名	司会者	記録者
3年3組	田崎 友紀	わたしたちの暮らしと納豆工場	結城市立上山川小学校 教諭 竹澤 正雄	筑西市立大田小学校 教諭 渡辺 孝弥
4年2組	川村 潤子	「笠間焼」を受けつぎ・生かすまち (笠間市)	笠間市立穴戸小学校 教諭 中山 光一	筑西市立関城東小学校 教諭 飯島 章夫
5年3組	近藤 理恵子	情報化した社会とわたしたちの生活	龍ヶ崎市立城西中学校 教諭 後藤 亮二	筑西市立村田小学校 教諭 島田 和宏
6年2組	川崎 武信	わたしたちの暮らしと日本国憲法	小美玉市立堅倉小学校 教諭 金子 和広	筑西市立五所小学校 教頭 深見 喜弘

学年別課題研究会（15：15～16：25）

学年	提案者		司会者	助言者	記録者
3年	茨城	筑西市立伊讃小学校 教諭 向田 伸一	結城市立江川南小学校 教諭 宮川 勉	県西教育事務所 指導主事 森田 泰司	古河市立諸川小学校 教諭 木村 成雄
4年	群馬	嬭恋村立鎌原小学校 教諭 加部 善基	東吾妻町立東小学校 教頭 山田 一彦	長野原町立北軽井沢小学校 校長 高橋 通泰	長野原町立応桑小学校 教諭 豊田 武司
5年	茨城	龍ヶ崎市立八原小学校 教諭 遠藤 弘太郎	稲敷市立江戸崎中学校 教頭 小岩 泰規	水戸市総合教育研究所 指導主事 折本 正巳	土浦市立山ノ荘小学校 教諭 渡邊 美智子
6年	千葉	八千代市立大和田西小学校 教諭 工藤 和子	八千代市立大和田南小学校 教諭 奈良 敬信	印西市小倉台小学校 校長 川嶋 知道	八千代市立大和田西小学校 教諭 村瀬 正

大会基調

「かかわり」を大切にして、「みえる」「わかる」子どもが育つ社会科学習の創造

1 主題設定にあたって

今回の学習指導要領の改善点として、公民的資質の基礎として位置付けられたのが、自ら社会にかかわり、よりよい社会の形成に参画する資質や能力です。

しかし、こうした資質や能力をつちかうためには、社会生活についての真の理解が、必要となります。すなわち、子どもたちが社会生活の諸事象の、直接には目に見えないつながりや背景がみえるようになり、その意味や意図までも、理解していくことが必要となります。しかしながら、現状の社会科学習では、子どもたちが目に見える事実を調べて発表したり、諸事象の知識をまとめたり、覚えたりするだけにとどまっていることが、多く見られます。そうした社会科の現状を改善し、自分なりの問いやこだわりをもち、目を輝かせて、社会生活の諸事象のつながりや背景に迫り、社会に対する見方や考え方を広げたり深めたりしながら、他と共によりよい社会をつくっていく子どもを育てていきたいと考えました。

2 主題のとらえ方

(1)「みえる」「わかる」とは

本大会では、まず最初に子どもたちが社会的諸事象を理解していく過程をとらえ直すことから、社会科学習の在り方を探っていこうと考えました。そのために、その過程を漢字で表す「見える」「分かる」とひらがなで表す「みえる」「わかる」の2つの段階にとらえ直しました。漢字で表す「見える」「分かる」とは、社会的諸事象を観察や調査などの活動を通して、直接に目で見て、理解することを意味しています。それらの活動から、諸事象の様々な事実を子どもはとらえることになります。この段階では、まだ、学習の過程でとらえた様々な事実は、子どもの中ではつながっておらず、個々の理解にとどまっています。学習が、単元の導入段階であったり、学習がまだ浅い理解にとどまっているときの、子どもの社会的諸事象のとらえを漢字の「見える」「分かる」ととらえました。また、ひらがなで表す「みえる」「わかる」とは、学習の過程でとらえた社会的諸事象のつながりや背景までもが、みえることを意味しています。また、子どもはみえたつながりを自分の言葉で表現したり、諸事象をつながけながら、その意味や意図などを自分の言葉で具体的に説明できるまで、理解を深めていることを意味しています。

(2)「かかわり」とは、

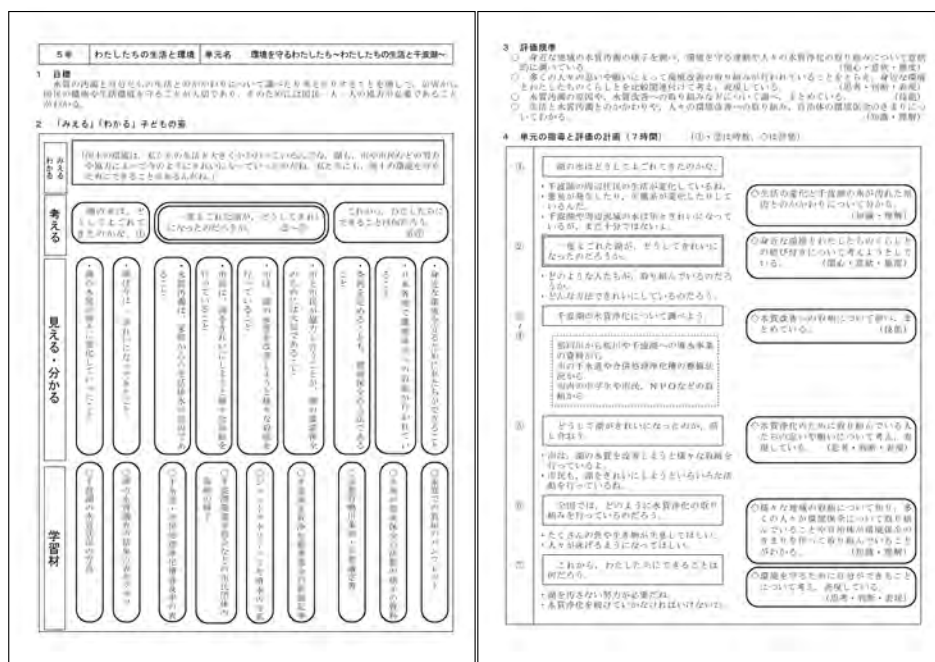
私たちが、目指す社会科学習は、単に「見える」「分かる」から、その先にあるもう一段ふみこんだ「みえる」「わかる」子どもを育てることにあります。そのためには、次のような3つの「かかわり」が、大切になると考えました。

- ①「学習の対象」との「かかわり」
- ②「学習者同士」の「かかわり」
- ③「自分」との「かかわり」

3 主題に迫るための手だて

(1) 『「みえる」「わかる」子どもの姿の構造図』を通して

漢字の「見える」「分かる」段階から、ひらがなの「みえる」「わかる」段階へと子どもの学習を深めていくためには、単元での学習内容を構造的にとらえていく必要があります。本大会の授業提案と併せて、全単元の構造図を作成していくことで、研究を進めていきました。また、構造図だけではなく、目標、評価規準、単元計画をも含んだ形で作成していくことで、より授業に活用できるものへと発展させていきました。



(2) 「みえる」「わかる」ための「かかわり」を大切に

3つの「かかわり」の質を高め、互いに関連付け、学習の中で具現化していくことが、具体的な授業実践研究の中心となりました。以下に挙げる視点をもとに、研究を進めていきました。

① 「学習の対象」との「かかわり」

「学習の対象」との「かかわり」では、何を学習材として掘り出して教材化し、子どもたちと出わせていくのか。そして、どのような切り口で出させていくのか。第一に魅力的な単元開発を進めることが、重要です。

② 「学習者同士」の「かかわり」

「学習者同士」の「かかわり」では、大きく単元の導入部分と追究活動の部分で重要な役割が生じてきます。導入部分では、「学習者同士」の「かかわり」を通して、単元を貫いていくような学習問題をつくっていきます。また、追究活動の中では、お互いに社会的諸事象の見方や考え方、感じ方などを出し合い、対象に対して多面的に見直すことで、互いの「みえる」や「わかる」を広げたり、深めたりしていきます。

③ 「自分」との「かかわり」

学習を進めていく際、「学習材」との「かかわり」、「学習者同士」の「かかわり」を学習の中で充実させていき、学習構造を構築していくことで、自ずとその学習場面ごとに「自分」との「かかわり」が生じてくると考えました。

これらの研究主題のもと、水戸市立浜田小学校、常磐小学校、緑岡小学校を実践校として、具体的な授業研究を重ねていきました。

本日は、第16回関東地区小学校社会科研究協議会研究大会茨城大会が、國學院大學人間開発学部教授 安野功先生をはじめ、ご来賓の皆様方、そして各都県の先生方、多数の皆様のご参会のもと、盛大に開催されますことに、お祝いとお礼を申し上げます。

本日は、700名を超える皆様のご参加をいただいていると聞いております。ご参会の皆様の社会科教育研究に対する関心の高さと、研修意欲の旺盛さに大変感動しております。

先の震災から、10か月あまりが経ちました。被災された皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、本県に対し、数多くの御支援や励ましを賜りまして、深く感謝申し上げます。

今回の震災は、社会科に携わるものとして、様々なことを考えさせられました。

例えば、地元の新聞社の方にお話を伺う機会があったのですが、震災直後からの停電への対応として、はじめのうちは自家発電で対応していたとのことですが、あまりにも長時間にわたる停電の影響から、自家発電機も止まり、新聞の編集や印刷の機能が滞ってしまったそうです。そこで、より確かな情報を求めている被災された方々のために、他県の新聞社に協力を要請し、印刷を他県で行い、迅速な輸送・配達等の対応を図ったとのこと。また、地元紙として、被災された方々にとって、「今一番必要な情報とは何か？」を考え、避難所の情報や交通情報、電気や水道などのライフライン復旧の状況などを中心に紙面を構成していくなど、まさに「使命感」をもって、職務を遂行されたとのことでした。

社会科は、人々の働きと営み、生きる姿、仕事の工夫・努力などを教えていく教科ですが、大震災という非常事態に直面して、自分の仕事に対する「使命感」をもって職務にあたるということ、こういった人たちの姿を「どのように子どもたちに伝えていくのか」、「どのように教材化をしていくのか」を考えなければなりません。

県内の津波被害を受けた漁港では、漁業の方はもちろん、行政の方、水産加工業の方、さらには製氷会社の方、運送業の方など、様々な皆さんが、もっている智慧を出し合って、連携・協力して、復興に向け努力されていきました。農業、工業も同様です。産業というと、働いている人個人の努力や工夫に視点をあてがちですが、実はたくさんの人が連携・協力して成り立っている。それが産業であり社会の姿でもあります。工業において、ひとつ部品が作れないだけで生産ラインがストップしてしまうという、今回の現状を見てもよくわかることです。

この未曾有の大震災を経て、あらためて社会科の役割、使命、これから子どもたちに伝え教えるかなければならないこと、社会科は大切な教科であることをあらためて実感いたしました。

「学力の向上」、さらに「国際競争力」というと、理数や英語などの教科に重点が置かれがちですが、あらためて今、社会科で教えるかなければならないことがあります。それは、人と人とのつながりであったり、物と物とのつながりであったり、さらには、それらの背景であったり、これは、まさに、本茨城大会の主題、研究内容が示すところでございます。

また、現在、世の中で議論されている「これからの防災」、「産業の復興」、「社会保障制度」、「ネットワークの重要性」、「エネルギー問題」等、これらを教えていく教科は、やはり社会科であり、これらを教えていくことは、我々社会科を担当する教師の使命なのです。

さて、ただ今は、茨城大会実行委員会研究部の中島隆行先生より、大会の基調提案がございました。「主題設定にあたって」、「主題のとらえ方」等についてご発表をいただきました。

ご発表の中にもありましたように、本大会の研究は、「目に見える事実を調べて発表したり、知識を覚えたりするだけにとどまっている」といった現状の社会科学習を改善し、子どもの理解の過程を2つの段階でとらえ直し、社会的諸事象のつながりや背景までもが「みえる」、さらに、「みえた」つながりを自分の言葉で表現したり、諸事象をつなげながら、その意味や意図などを具体的に説明できるまで理解を深めていくこと、つまり、思考力・判断力・表現力を連続させながら活用し、深まりのある、子どもたち一人一人が輝く学習を目指し実践を積み重ねられました。

その中でも、『「みえる」「わかる」子どもの姿の構造図』の作成は、その手立てのひとつであり、これは、授業者が単元の学習内容を整理し、構造的にとらえるために作成されたものです。授業者が、その単元で目指す子どもの姿を明確にし、また、どのような学習材と出会わせていくのか、それらの学習材からどのような理解につなげていくのかを整理したものです。さらに、構造図の中に、学習問

題を位置付けていること、単元の指導計画と評価計画を一体化していることから、実際の授業に反映しやすい、より活用しやすいよう工夫されております。単元をひとつのスパンとして、その学習内容を構造化することは、授業づくりにおいて、最も重要な作業です。

教師は誰でも授業をつくるにあたり、「教材研究」という作業を行っております。社会科では、教材や資料の開発と作成はもとより、問題解決的な学習の組み立てや、学習活動の構成、発問や指示の吟味、板書計画、さらに評価の計画など、様々な内容について事前に研究と準備が行われます。今回提案されております構造図の作成は、単元の指導の流れや学習内容の全体をとらえる意味で、大切な教材研究と言えます。

また、この構造図は、県内各地の作成委員が分担して作成しました。今回の『「みえる」「わかる」子どもの姿の構造図』は、デジタル化して「茨城県教育研究会社会科教育研究部」のホームページで発信していただいております。茨城から発信されるこのデータを、ぜひ各学校で大いに活用し、それぞれの地域の特色や実態に応じて自校化を図っていただきたいと思います。

さらに、深まりのある学習活動を展開するため、もう一段ふみこんだ「みえる」「わかる」子どもを育てるために意識された「3つのかかわり」、つまり、「学習対象とのかかわり」、「学習者同士のかかわり」、「自分とのかかわり」も、授業改善のための大切な視点となっております。

「生きる力」を育むために、社会科においては、例えば、「国際社会に生きる日本人としての自覚を育てる」など、児童に実社会、実生活を視野に入れて、学習の目標を持たせることが大切であると考えます。「生きる力」という考え方には、「現実の社会で大人がどのように生き、そこでは何が必要とされるのか」を見せることによって、「学ぶことの意義」を子どもたちに伝え、「何のために学ぶのか」という目的意識を明確にするという意味が込められているのだと思います。

まず、基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させ、それらを基礎として、実際に活用できる力へと育成し、さらに、この活用する力を基礎として、実際に課題を探究する活動を行うことで、自ら学び自ら考える力を高めることが必要であります。

これらは、決して一つの方向で進むだけではなく、相互に関連しあって力を伸ばしていくものと考えます。知識・技能の活用が、知識・技能の定着を促進させたり、探究的な活動が知識・技能の定着や活用を促進させたりすることにもつながるからです。

しかし、現実の社会科の授業の中には、「調べたことをまとめたり、発表したりする学習」にとどまってしまう、社会生活に生きて働く知識や力を、「生徒が確実に身に付けている」とは言えない実践も、一部に見られます。

こうしたことから、本県の学校教育指導方針「社会科」では、「身に付けた知識、技能の活用」を指導の重点としております。具現化のための取組といたしましては、「作業的・体験的学習や問題解決的な学習の充実」、「考えたことを自分の言葉でまとめ、お互いの考えを伝え合い、深め合うといった言語活動の充実」、「地域教材の作成・活用と地域人材の効果的な活用」、等を示しております。

さて、本日の午後、市内の浜田小学校、常磐小学校、緑岡小学校を会場に、授業公開や分科会において具体的な授業の展開について提案されます。

浜田小学校では、「学ぶ喜び（気付き、みえる、わかる）を支え育み、追究力、表現力、コミュニケーション力を高める学習指導の在り方」、常磐小学校では、「社会とのかかわりを大切に、自らの考えを創り出す力を育む社会科学学習」、緑岡小学校では、「豊かなかかわりによって自分の考えをみがく社会科学学習の創造」、というそれぞれの学校の主題にそって、これまで茨城が取り組んできたことが明示されますので、どうかご参会の皆様活発な意見の交換によって、研究を実り多いものとしていただきたいと思います。

最後になりましたが、4年前の本研究の立ち上げにあたり、ご尽力されました、前研究部長の砂川洋一先生、そして、関東地区小学校社会科研究協議会会長の飯島尚之先生、本大会の実行委員長を務められました北澤正先生のもと、全会員をあげての「取り組み」、「研究の体制づくり」等は、本日もご参会の皆様にとって、たいへん参考になるものと考えます。どうぞ、皆さんご自身の社会科教育研究に生かしていただければと思います。

また、このような、実りある研究大会ができましたことは、安野功先生のご指導をはじめ、ご来賓の皆様、会場を提供していただいた各小学校の皆様、関係の皆様方の御尽力によるものでございます。皆様に、感謝の言葉の述べさせていただきまして、言葉足りませんが、指導講評にかえさせていただきます。ありがとうございました。

【 記 念 講 演 】 「 関 小 社 茨 城 大 会 の 意 義 と こ れ か ら の 社 会 科 教 育 」

國學院大學人間開発学部 教授 安野 功 先生

先生方こんにちは。関東地区小学校社会科研究協議会研究大会が、広い会場のなか、先生方が埋め尽くされた状態で開催されることを本当にお喜び申し上げます。本会の開催までに楽な道をたどらず、日程変更をせざるを得なかったわけです。また、一番大事な時期である昨年度、予定されていた授業研究などを延期するなどの大変厳しい状況でした。被災地の一つとして、担当地区である茨城県の被害が大きかったわけです。そうした中で、本日のように大変素晴らしい提案、その後の授業実践、また、各担当地区それぞれの研究交流が大勢の参加の下に開催されますことを、お喜び申し上げます。昨年11月東北大会を盛岡で予定通り実施いたしました、小中合同参加でした。予定よりも少なかったのですが、600名を超えたなかで岩手の盛岡を会場として岩手の各市町村からも必ず1名が参加しました。その中で「開催して良かった。」という声が聞かれました。それはなぜか。社会科は元々現場の学びです。現場で人が生きている姿がやはり一番の学び所であるということです。そこで、何が見えたか、「人間は何を願うのか、我々人間が何を願って生きているのか」と言うことが東北の場合、非常によく見えたということです。そうした願いは多くの人たち共通のものであります。これからの自分たちのふるさとをどう作っていくか、いわばベクトルがそろって力がわいてきました。そのことを正面から向き合える教科は何かと考える時に「社会科」であろうと声があがったのです。社会科というものが教育課程や人間形成の中できわめて中核的な教科であるということは、ご参会の先生方も十分に承知しているわけです。私もそうした自負をもって新しい学習指導要領、これからの在り方を共に考えてきたわけです。その貴重な場として、こうした大会が開催されることを意義深く感じているわけです。

先ほど、飯島会長様のお話、また田辺先生のご指導、中島先生の分かりやすい提案の中で、本大会がどういう特色をもっているのかが十分説明尽くされたのではないかと思います。私もテーマを設定した段階から共に学び、共に悩んだ4年間でした。何を本大会に期待していたのか、またそれはなぜか、あるいはこうしたものがこれからの社会科教育のどこの部分にあたるのかを改めてここで整理をしながら、本大会の提案、発信、その成果をそれぞれ関東各地の研究会に持ち帰っていただきたいと思います。更に、それが、全国の社会科実践研究に育って行くことを願い、これからの社会科教育を本大会の意義と共に考えていきたいと思っています。

まず、基本的に今を見るときにこれまでと比べてみるとよく見える、これが社会科の本質的な見方です。これまで社会科はどういったメッセージで授業作りがなされていたのでしょうか。「調べて考える社会科」、基本的にはあまり変わらないと思いますが、あまり最近言われなくなってきています。その中の1つに、「調べて考える社会科」というメッセージが出始めたころに、子どもたちの学び方とか学習の仕方、そうしたものを大事な学力ととらえて一生ものとして子どもたちに持たせるんだと言われていたのではないのでしょうか。ところが、10年間学習指導要領が全面実施をしていく過程で、学力について不安があるのではないかと、学力問題が同時におこってきたような気がするのですが、いかがでしょうか。特に、国際学力と言う中で、様々な調査の中から日本の中で課題があり、現場の授業改善の中に様々なメッセージがあったのだと思うわけです。その中で、特に今回の改訂につながったのは、子どもたちは考えることが弱い、文章問題などを含めて自分たちの考えを書いていくことができないということです。「調べて考える社会科」を大事にしていくのであるならば、そういったものに答えるものでなければならないわけです。どうしてそういう結果を招いてしまったのでしょうか。いろいろ考えてみると「調べて考える社会科」は表面的なメッセージだったわけですが、本質には調べて考えた結果として、子ども達がどうなればいいのかあまり議論されてこなかったのです。「調べて考える社会科」がどちらかというと保護的な側面がやや一人歩きをしたのではないのかという感じがするわけです。小学校から中学校へという接続、関連、この部分がどのくらい議論され大事にされてきたのでしょうか。というのは、中学校は、最終的に義務教育が終わって世の中へ出ていく子ども達にある一定の学力をもたせなければならないわけです。では、ある一定の学力とは何なのでしょう。立憲民主主義社会に有効な1票を入れるのは社会に参加する権利であり、それには参加料を払うわけです。それは何かというと税金です。その税金が、本当に自分や多くの人々が願うと

おりに役に立って使われているのか、しっかり見極める力をつけて世の中に出して行かなければなりません。それが中学校社会科の大事な役割だろうと思うわけです。小中のつながりの中で見ていったときに、はたしてこれまでにそういう社会科の議論が小学校でなされてきたかということを問題視しなければならなりません。そう考えたときに、茨城県は、小学校も中学校も教えている先生方が多いわけです。小学校と中学校の相互交流からなされた実践論であり、この大会の大事な視点だろうと思います。そうした基盤があって「みえる」「わかる」という子どもの学びの姿が示されていますが、この先に中学校があるわけです。これは最先端だろうと思っていますし、価値があるわけです。

3つの「かかわり」を大事にするという言葉がありましたが、それは、改訂の重要なキーワードです。先生方が思い浮かぶのは「社会形成参画」かもしれませんが、私はあえて「公共」と言う言葉を1番にあげます。これからの社会科は「公共」を大事にしなくてはいけないと思っています。社会科の生命線ではないかと思っています。「公共」が前提にあり、その中から出てくるのが「かかわり」であって、その次に出てくるのが「社会形成参画」だと思います。しかし、社会形成参画が一人歩きをしているように思います。茨城県の大会の特色を、今回の指導要領改訂の特色と結びつけると3つあります。

1つめは「義務教育改革」です。これは裏側に、教育基本法、学校教育法の改正があります。小学校を義務教育の前段階、中学校を後段階と捉えて義務教育の目標・目的を明確においていくというのが今回の改訂のポイントの1つめです。改善の基本方針は小、中、高等学校も一緒の問題として考えていきたいと思っています。義務教育改革は、小中の7年間の学びをどう作っていくのか大事だということです。

2つめは「生きる力の育成」ということについてキャッチフレーズが変わってないということです。しかし、そこには、学力に対しての答えを出していかななくてはならないのです。学力を保証することです。そこで、社会科の学力には2つあります。1つは明日の授業で、先の学校で役に立つ確かな学力です。特に典型的なものは多面的・多角的思考あるいは公正に判断する力これが社会科の観点として入っています。そのことを重視したのがまさに「調べて考える社会科」です。もう1つは、「社会的な見方や考え方」があり今回の改善の基本方針では次第に養われるようにしていきましょうということです。「社会的な見方や考え方」は教えるものではなく、学習者自身が自分で培い育てていくものであり、それを養っていくのが我々だということです。「社会的な見方や考え方」とは何なんだろう、ここを大事にしていかなないと学力が見えにくくなっていきます。そのことを茨城では、具体的な姿として「みえる」「わかる」子どもの心として具現化しようと奮闘してきたわけです。

3つめは「言語活動による授業改善」です。今回は、思考・判断・表現を育てる方策として言語活動を国語科を中核にしながら全ての教科で行う、社会科も中心になる教科であると認識しています。また、これからの社会科のキーワードとして3つあげると、1つは「公共」、2つめは「社会的な見方や考え方」そして、3つめは「かかわり」です。3つは相互に関わっていますが、特に大事にしたいのが「公共」です。公共の精神をどう捉えるかという次のようになります。まず学校教育法の中で、「公正な判断力並びに公共の精神に基づき」という2つの大前提があって主体的に社会の形成に参画しその発展に寄与する態度を養うのが義務教育の大事な柱です。その中核になる教科は社会科なのです。それはなぜか。基本法改正の過程の中で平成18年衆議院の特別委員会において文部科学大臣が、「公共の精神とは、国や社会の問題を自分自身の問題として考え、そのために積極的に行動する精神」と説明しています。さらに、公共の精神の中で、「他者との関わりによってつくられる社会を尊重し」と説明されています。これからの社会は、他者とのかかわりによってつくられるものであり、これを尊重していかなければならないのです。官と民の間に公共社会があり、その部分で関わりを大切にしていく。そうすると、主体的にその形成に参画する公共の精神を養うことになっていきます。こうした公共社会とはいかなるものか、それが見える教科が社会科なのです。

次に、そうした公共の精神をもうちょっと突っ込んで捉えるとどういえるのだろうかと考え、身近な事例を1つ言ってみようと思います。私が北海道の社会科大会に参加して、北海道は冬になると、札幌駅に行きますと雪がありません。雪まつりの会場に行くところがあるんですね。ところが一步、ちょっと路地に入ると両脇に雪がたまっています。さらに、もっと奥に行くと奥深いのに雪がない所もあるんですね。ここで大きな問題となるのは、毎年たくさんの税金をかける。この税金は、果たして意味があるのかと、毎回言っているようであります。そこで必ずあがってくるのが、我々の税金が使われている除雪なのに、何で俺らの道の家の前の道は雪をかかないんだっていう苦情が来るんだ

そうです。これはどう考えても、それは、あなたの家とあなたの前の家と裏の家と横の家で使うのだから自分たちでかいた方がいいんじゃないですかと、それは、近所で申し合わせて、雪かきの日を決めてやればいいんじゃないですか。駅前、これは申し訳ないけれど客とか招き入れるとか、それこそ多くの人たち、まさに公共の場なので、そこは税金を使わせてくださいという話になるんですね。そうすると、公共とは何だろうと、道は公共だ。俺の家の前の道だって同じじゃないか。私物だったら通さないぞ。そうした時に、もし本当に道が公共で、どれも全てみんなの道で、どこも同じようにしなければいけない、という考え方が公正、正しいのであれば、確かに税金は、全てに使われなくてはならない。その時税金は、果たしていくらあったらいいのでしょうか。ということになります。最終的に、その税金を負担するのは誰なのでしょう。という話になります。そうすると、やはり公共と言うものの考え方には、いくつかあります。みんながやらなければいけないと言う公共もあるし、部分的にそこに関係する人たちが、その関係に集まってやった方が良し、自分たちの方から自分たちでやった方が良しと言う風に、分けできることを、雪の問題は教えてくれるわけであります。

こうしたものに対して正しい判断を与えてくれるのは、中学校社会科の公民の法律と公正という考え方です。法律で言えば、そこに税金をかけるのであれば、その税金が最大限、効果を発揮するというスタイルです。公正な考え方は、1つは、プロセスが明るみに出ても、誰も文句を言わない。手続きがちゃんと公明正大な、納得ができる手続的公正ですね。例えば、それをもし市議会がそうは言っても、みんなで決めるんだ、路地でも何でも雪が降った所は、公共の場所だから、税金を使おうとみんなが納得して決めれば、誰も文句は言わない。だけど2つ目として、同じ公正でも、結果の公正というのがあります。結果的にそれが出ている公正で、私の道、隣もそうなんです。自分たちの道をずっと我慢して分け与えてきて、これを私の道だから税金を使いませんよね。だけど、市が造った道であれば片付けるということになる結果的にこうです。手続きがこうでしょう。これは自分の土地なんだから市に提供しているよ。だから公正とは納得できない。公正とは、結果の公正とかも、ちゃんと保障できるかということでも吟味しなければならない。そうすると多くの人たちが確かに駅前の場所というのは、本当の意味での公共だから、そこに税金を使うことは納得できる。いわば機会均等です。誰もが、その機会を持っているから公正であるから考えると、なるほどと言うその解明ができる。逆に言うと、そうした見方や考え方は、中学校だけで作るんですか。そうすると小学校の社会科でも、そういう面を養うチャンスはあるんです。農業の学習の中で、せっかく作ったキャベツを踏みつぶしている写真を見て、せっかく作った生産物をつぶすと効率が落ちるが、売り手側にたてば、価格として見れば、せっかく作った儲けを入れたいがつぶさずにおけない複雑な思いがあります。できるだけ自分の働きを高く評価し、効率の面での矛盾が出ます。そうした矛盾の中で、我々は、どうやって考えて判断していくか、社会科の本当の学習が生まれます。小学校の社会科で真剣になってそういう場面を考えていく学習を手がかりにしながら、子ども達がおかしいなあっていう問題を感じてくれば、中学校に入った時に、あっ、あの場面っておかしいと考え、このことだったのかと子どももぱっと開くでしょう。そういうふうなつながりで社会を見えていますか。ということなんです。

1つの公共を考え、その社会は、プロセスで公共を捉えるとわかりやすいのかなと思います。まず第一に、世の中の問題あるいは社会というものが、どうその問題と人々が対峙しているのか見極めているのかと言うこと、その部分のことをなぜと考えてみると、当然その答えとしてそれは、みんなが願っていることなのかとか、こうした人たちが、そのまま放置されてはまずいのか、社会におけるより多くの人たちみんなの願いは何なのかという所ですね。子ども達の思いが突っ込んでいくんじゃないか。社会科で一番大事にしていくことは、現場で生きている我々は、どういった願いというものを持って生きているのかをお互いに真剣に考えていこうじゃないかと思います。それが、社会が人間を大事にする社会科、やはり現場を学ぶとして大事にしていく社会科の第一歩ではないかと思うんです。やっぱり我々というのは、社会を作っていく社会に対する部分は、少なくとも私の願いが実現されみんなの願いが実現され、社会がよりよくなることですね。私の願いが実現されない社会っておかしいじゃないですか。だけど、みんなの願いがそこにあるじゃないですか。おかしいですね。

さらに今の世の中はできるだけ、自分も生かす。それでみんなの願いを実現する。私を生かす、私のレベルを実現することが世の中の願いを実現することですね。そういうのを大事にしていきますよということが、そのなぜという問いの中から導き出すのは、やっぱり人間というのは、そういう願いを本当に実現したい。次に、そうした願いがみんなあるという中で見た時に、なかなかそう簡単には上手くいかないという現実をですね。社会をちらっと見せてあげたいな。その中の一人として生きて

いる自分というのは、そんなこと上手くできない一人だし、近所だってそんなことできない。どうやったらいいの、そこに自分と重ね合わせると矛盾することと出会わせて、達成した方がよいけれども、そうっていない現実がある。自分がそう思っても、なかなかできていない場合がある。それをやっている人やできている世の中は、どうやっているんだろうねという所に本当に学んでみたいという、そこでやっぱり、そういう願う社会というものを現実的に実現させている社会、そのことをしっかり解明してみたいくなります。そうやってきて、本大会に言うところのかかわりを大切にして、みえるになってくるわけです。表面からも見える。本当の姿が見える。それが確かにめざす社会に近づいていきそうというふう考えた時に、そういうふうな問題とどう向き合っていっただろうかともう一度、自分を見つめ直して自分の考えと、そういう公共というものが、みんなで形成していかないと、なかなか上手くいかない。このことを、中学校の問題で置き換えてみますと、中学校でこういう授業が行われているんですよ。「年金問題と財政」。本来取引は個人が自由である。だけれども、自由でやっているから上手くいかない問題の1つに、福祉の問題がある。福祉の問題は、どうしても弱者ですから、そこに初めて国がかかわっていかないと、いわば公共社会を作れない。ところがですね、公共社会に国がかかわるという問題の1つに年金制度があります。税金が使われるのは当然、けれど、その中身を見ると、もう不公平が起きている。ということを授業にぶつけるんですね。その授業を見た限り、40歳位ならだいたいOKなんですね。高齢者と言われる僕より少し上の人たちは、ぼろ儲けの世代と言われてます。ただ、それより下は、どんどんと借金を背負う世代で、生まれた瞬間に負債が500万、そうすると、その人たちは、受け取る側によると、今の高齢者より、はるかに少なくなる計算もできます。

今のままで、そうした不公平の中で、これまで、先ほど言った法律と公正から見て不公平である。結果が不公平じゃないか。どうやっていけば公正になるのかというふうに考えてみながらどうすればよいか。中学校で学んでいくわけです。世の中の問題というものをしっかり見極めていくためには、その前の学習として、少なくとも小学校の学習として、私達の願いは多くの人達の願いを実現するために税金を集めて、その使い道を決めて、みんなのために使われているんですよという学習があった時に、そう学んだのに年金制度を見ると、みんなのためと言えないような現実があるぞ、本当に大丈夫か、中学校でやった時に、初めて小学校の学習がどのくらいインパクトがあったかによって、中学校で迫力が出る。これなんかは、まさに公共の問題を考える基本的な問題を中学校でやるわけで、そこで自分の問題として真剣に考えていく生徒に対して、どんな学びを小学校でやったらいいのか。我々、小学校の社会科で真剣に考えていく、その公共と言うものを考えた時に、社会科の中で第二番目として大事にしていきたいのは、そういう公共を扱う社会科の授業を、どうやって作っていったらいいかという授業構成です。カリキュラムの中で、何を大事にしたらいいのか。まず初めに子ども一人一人は、自分の考えを持つ、自分の考えを持って意見を表明するという授業を作ることじゃないかと思うんですね。子ども一人一人は、様々な家庭環境や様々な周りの人の考えで、一人の生活者として、すでに生きて生活していますから、世の中に対する見方や考え方を、その子なりに持っています。その子が、きちんと自分の考えを表明できる。表に出せるっていうふうにしてあげる。言語活動の中で、きちんと調べて、メモを取って、考えを持って授業に臨む。その次に、全員が参加しなければダメなんじゃないですかね。みんなが全員で参加する。ただしそれは、全員話し合って、ばらばらになって、ある一定の手続きで、めあてを小グループとか何かいろいろな手続きの中から、ある一定のまとまりのある部分として意見がある。そして、先生の方で交通整理をしながら、みんなの目に見えるような形で、たぶん、そうされていると思います。けれども、時々、聞くんですよ。「発表しないんですよ。一部の子どもが活躍しちゃってね。」それを言ったらおしまいだとならないために、最後の代表の子が言ってもいいから、全員の意見を一人として言うようなプロセスとし、そのところが授業づくりのポイントじゃないかと思います。全員参加の授業づくりは、まず第一なんです。例えば、前時の復習から入って、本時は何が中心の課題なのかを、まずみんなと言えば、そこから自分は、どう考えるかということをお隣さんで相談し合って、「そうだよね。」と拍手し合って、「これでいいだろうね。」と、最後は黒板の中に、それが先生の言葉でなくて、子ども達が納得できる言葉となって、黒板に並んでいて、それをみんな考えていき、新しい言葉が生まれてきて、それで続けて授業ですよ。丹念な仕事じゃないかと思うんですよ。その中でできてくるのは、自分の私の考えがありながらも、友達とかかわり合って学ぶと、みんなの考えも入っていることと、そのみんなの考えを、さらに組み立てていったりつなげたりすると、「もっとすごいみんなの考えがあったね。」というこ

とが見えてくる。そこをたどってみると自分に来るし、たどっていくと、その考えに行くよというそういうかかわり合いの学びができれば理想です。つまり、社会的見方や考え方が1つとすれば、私の見方というのは、みんなの見方という中に、つながっていくんだという、みんなの見方というのが存在するということが授業の中で体験することではないか。できれば次に、そのみんなの見方というのが中身はいったい何なんだろうなあと言った時に、ここで大事にすることは、僕は公共だと、それは何かと言うと、1つは、そういうふうに自分が調べ、考えた中身というのは、どうも多くの人の願いがあって、それを実現するために、人間が社会にかかわりを持って、作りあげた成果があったような結果なんだよな、世の中は、人によって作られたことであることを見えるようにしてやることじゃないかなと思います。

人によって作られたものなんだよなあと願う時の大事なポイントは、個々人でなくて多くの人達の願いと、それを実現する多くの人達のかかわりという姿として人間を見ていくにはどうするのかということです。そう考えると、願いとは、全部実現されてるわけではなく、まだやらなくてはいけないことがあって、もっと見ると、一見できているようにしてみても、本当は、まだまだできていないものがある。もっとよくするには、どうすればよいのかなと考えていかなくてはだめな問題じゃないかとする。みんなのものになるには、どうしたらいいかと考えるのが必要で、その1つが、今の世の中だけ見てはいいけれども、次の世代は、次の世代から見て、本当に大丈夫か、持続可能な社会と見る。あるいは、昔、同じようなことがあったぞ。このままでいいのかという歴史的な先人の姿に、もう一度照らしてみても、危ないんじゃないかと、そういうふうにして、より広い視野で、きちんと見ていく、より広い空間の中で見ていく。

中学校の社会科は、ギリシャの破綻を取り上げていくんですね。それを見ると生徒は真剣になります。ギリシャの次に、日本じゃんと言いながらね。そういうのを世界的に見ていって見ると、今の問題だけでなく、子ども達が世の中に目が開いていきます。社会的な見方や考え方が大事なものは、世の中を見る目として、だんだん開いていく目ということで、一人一人は、自分の経験、自分達の素朴な目として世の中を見ていく姿を大事にしながら自分の見方とする。そして、それをみんなで、いくつかの考えがあることを、子ども達自身に発見させる。

次に、そう言った世の中というのは、みんなの願いを実現したいということを人間が作ってきているという中で、どうもそれを、いろいろ見てみると、まだまだいろいろあるよね。と言って、どうすればいいんだ。自分もそこに真剣にかかわって、世の中を作って、どうやって作っていったらいいのかなと、そこに自分自身をかかわらせていくことが大事なのかなと思ひまして、社会人になるための考え方を作っていく。そして最後に、そうした授業を作るためには、「かかわり」が大事であるということで、その「かかわり」については、すでに大会の方で、ご説明がありました。僕の言葉で言うと、1つ目は、実際に、そういうふうに社会で相互にかかわり合って、公共的な社会を作っている人、これを内容、あるいは教材として、まず学ぶということです。

そのことは、例えば、今回、生命の安全、財産の安全、これをどうやって実現していますかという中に、地域の人々の協力を内容に入りこんでいます。それから、県の特色の中に、県の人々、自分達の地域ですね。伝統や文化や自然というものを、自分の地域ですね。宝としてそれをみんなで協力して地域づくりに生かそうかという協力する姿を教材の背景に内容の改善を図っていく。

生命を守ると考える時に、そういうものが一人では守りきれないけれども多くの人達が協力すれば、よりよくできるのではないかと、インターネットの公共利用という中で、生命を守るネットワークなんて言いながら、病院、あるいは自然災害で、我々が守るために、何とかして、そういう公共的な願いを実現するために、インターネットを活用していこうとなっていく時に、学習ができるような内容に入りこんでいく。新指導要領の中の、自分達で法や決まりを考えさせることについて、自分の家の前にゴミ置き場が設置されると言ったら、家の近所の人達で決める。みんなでいろいろ話し合って、納得の上ででしょう。どう本当の公共というものとしてかかわるかという、教材化するかということのを大事にしたいです。仲間とともに学び合っていくということですから、言語活動ですね。間違っても黙々と新聞に書いて言語活動とやったら、かかわりがなくなってしまうですね。お互いに自分の考えを持ち、それでみんなの考えを聞くことが、本当の社会科の大事な力を育てるのになんていんだというふうなことで説得力がありますよ。

最後に、自分のこととして新たに目を広げていって、どうかかわるかということのを大事にしていく、こうしたかかわりを大事にしていくことは、たぶんこれからも大事なことと思っています。

結びになりますけれども、指導案集に、「みえる」「わかる」子どもの姿という所で、だれがどうやって、震災で壊れた道路をすぐに復旧させたのかということを考えて、みんなが道路の復旧を願う。その中で、本時では、授業づくりの課題として、関係図をもとに、地方公共団体や国の取り組みを考え、意見交換をする。いわば授業づくりの絶対抜けない山場、ポイントで、ここの中で、子ども達相互にかかわり合い、どういふかかわりを持って学ぶのかということが、指導案の大きな山場となっているわけです。

同じことが汚れていた千波湖の水は、どうしてきれいになったのか、これは、環境の学習ですけど、そうすると行政は、市民は、いわば誰がっていうことに当たるか、そこで、人間のかかわりや本時の指導の課題、水質浄化のため、様々な人々がかかわっている。この様々の場合の具体的なかかわりを子ども達に、どう授業の中で発見、仕組んでいくかを指導案展開に具体的に記されています。これは、一人で作るのではなくて授業の中で、子ども相互、教師がかかわって作るんですね。そうしたものが指導案の中に示されています。県の学習、自分達の地域、これをですね、協力して、同じように、共通の課題の中で協力しながら笠間焼を受け継いで生かしてきたのだなど、実際の学習をする時に、どういふ人達が、どういふかかわりを持ってということが見える。

是非、午後の授業、そして、午後の研究協議の中で、こうした具体的な提案に対して、子どもの発言とか子どもの表情とか子どものノート、メモとか、具体的根拠で、研究協議をして欲しいなと思います。

実は、ここにあるプランは、みんなのできた実践論ですから、必ずしもどれが正しいかは、わかりませんよ。それを現場の目で、話し合いをしてほしいと思います。

また、小・中7年間の学びという目で、つながりと連続の目で、協議会の中で議論して欲しいなと思います。そして、「公共」とか、あるいは、「社会的な見方や考え方」と言った、これからの社会科を考えて、本質的な目を、大事にしないで、各都道府県の提案を議論して欲しいなと願ひまして、私の話を終わります。

【分科会】

第1会場 水戸市立浜田小学校



〒 310-0812

茨城県水戸市浜田1丁目1-1

TEL 029-224-2717

FAX 029-224-2718

E-mail hamada-e@magokoro.ed.jp

<http://www.magokoro.ed.jp/hamada-e/>

校長 吉澤 一喜

(日程)

11:45	13:20	14:05	14:20	15:05	15:15	16:25
移動・昼食	公開授業	休憩	学年別 授業研究会	休憩	学年別 課題研究会	

(公開授業・学年別授業研究会)

学 級	授 業 者	単 元 名	司会者	記録者
3年3組	江原 輝子	かわってきた人々のくらし ～古い道具と昔のくらし～	常陸大宮市立大賀小学校 教諭 大津 香	古河市立古河第四小学校 教諭 生沼 芳弘
4年2組	田村 雅子	備前堀をつくった伊奈忠次	龍ヶ崎市立大宮小学校 教諭 宮本 一利	古河市立小堤小学校 教諭 谷畑 威至
5年2組	桑原 和彦	社会を変える情報	北茨城市立中郷第一小学校 教諭 塩野 淳子	古河市立仁連小学校 教諭 杉山 史康
6年2組	三浦 広興	わたしたちの願いを実現する政治	ひたちなか市立前渡小学校 教諭 嶋崎 光男	古河市立下辺見小学校 教諭 坪山 昌則

(学年別課題研究会)

学年	提案者	司会者	助言者	記録者
3年	栃木 足利市立筑波小学校 教諭 柏瀬 順一	足利市立山辺小学校 教諭 池山 勝幸	足利市教育委員会 指導主事 柏瀬 和彦	足利市立久野小学校 教諭 増田 香代子
4年	埼玉 川口市立本町小学校 教諭 内山 達也	上尾市立尾山台小学校 教頭 山田 浩一	川口市立根岸小学校 校長 清水 健治	川口市立鳩ヶ谷小学校 教諭 北川 智之
5年	茨城 日立市立台原中学校 教諭 杉澤 季展	常陸太田市立山田小学校 教諭 和田 秀彦	日立市教育委員会 指導主事 高橋 重樹	高萩市立君田小学校 教諭 富山 明子
6年	茨城 ひたちなか市立外野小学校 教諭 松本 恵	ひたちなか市立前渡小学校 教諭 嶋崎 光男	ひたちなか市教育委員会 指導主事 関口 拓生	ひたちなか市立那珂湊 第二小学校 教諭 押野 恭子

学ぶ喜び（気付き、みえる、わかる）を支え育み、追究力、表現力、コミュニケーション力を高める学習指導の在り方

—社会科を重点とした地域資源を生かした授業の工夫を通して—

地域資源（もの・人・こと）とのかかわりを大切にして、「みえる」「わかる」社会科の創造的な授業展開を図り、子どもたちの追究力・表現力・コミュニケーション力が高められるよう努めてきました。身近で新しい教材や資料とのかかわり、それぞれの思いを語り合う話し合いなどを通して、いろいろな人々の営みや工夫が実感でき、支え合う人々の社会のよさがわかるようになってきました。

1 公開授業から

【第3学年】

「かわってきた人々の暮らし」の単元において、今なお使われている身近な道具である洗濯板を手がかりとし、それを使った体験から生まれてくる気付きを基に、昔の人々の知恵や工夫、生活の変化に対する問題意識を高めていきました。



【第4学年】

「備前堀をつくった伊奈忠次」の単元において、備前堀のボランティアガイドとなって自分が話す立場になることで、その歴史的価値や地域社会の環境における景観美、役割の重要性をとらえ、備前堀を大切にしていきたいという思いを高めていこうと考えました。



【第5学年】

「社会を変える情報」の単元において、東日本大震災での体験をもとに、防災ネットワークを取りあげていきました。ネットワークの関連を関係図にまとめていくことで、それらがどのように関連し合っているのか、とらえていきました。



【第6学年】

「わたしたちの願いを実現する政治」の単元において、震災の体験を基に壊れた道路がどのように修復されていったのか着目し、わたしたちの願いを実現していくために政治がどのような働きをしているのか、とらえていけるようにしました。

2 学年別授業研究会から

研究協議では、単元構成の意図や学習問題の設定の在り方、学習者同士の考えをどのようにかかわらせていけばよいのか、など熱心な協議が行われました。また、一人一人の追究活動のまとめ方やそれらを表現している子どもの姿に本大会の研究の成果を見いだしていただきました。参会の先生方には、たいへん貴重なご意見をいただきありがとうございました。今回の研修の機会を基礎にして、今後もより豊かな社会科の授業づくりに取り組んでいきたいと考えています。

文責（深作 一徳）

単元名	「かわってきた人々の暮らし ～古い道具と昔の暮らし～」 授業者 水戸市立浜田小学校 教諭 江原 輝子		
司会者	常陸大宮市立大賀小学校 教諭 大津 香	記録者	古河市立古河第四小学校 教諭 生沼 芳弘

【提 案】

本単元は、古くから残る暮らしにかかわる道具と、それらを使っていたころの暮らしの様子を調べることを通して、地域の人々の生活の変化や願いを考えていくことをねらいとしている。

そこで、今なお使われている身近な道具である洗濯板を手がかり（ツール）とし、それを使った体験から生まれてくる思いをもとに話し合うことにより、昔の人々の知恵や工夫、昔の生活の苦勞に気付いた上で、生活の変化に対する問題意識を高めたいと考えた。

前時の洗濯体験をもとにした本時の話し合いでは、洗濯板が使われていた頃の暮らしと今の生活の違いから、学習課題を見付けることができたと思える。

【協議内容】

Q 構造図と指導案がリンクしているが、「昔の道具のよさとそれが使われていたころの暮らしの様子」を、「道具」と「暮らしの変化」に分けたのはどのようなわけからか。

A 道具には、先人の知恵が詰まっていることにふれさせたかった。そこで道具にこだわって、今も使われていることのよさに気づかせることを考えた。その後にくらしの変化を調べることにした。

「見える・分かる」から「みえる・わかる」学習過程を考えた。

Q 終末時の児童のワークシートを見ると、学習課題が多岐にわたって出てきているのが伺えたが、どうやって集約していくのか。

A いろいろなものに入り込んでいるので分けられるところは分けて、「暮らし」「服装」「道具」等に分け、調べる分担をし、調べる学習を進めていきたい。また年代的には、「祖父母の子どもの頃」「父母の子どもの頃」に設定し、家族からの聞き取りを主にしていきたい。そうすることによって、家族の絆も深まると考えた。

○ 授業者は、次時の学習課題をつくるのに児童はとまどっていたというが、前時の体験の想起とG Tの話による意欲付けがあり、どのような工夫をしているのか、いろいろな道具について調べていきたいといった子がいたので、それらを組み合わせれば学習問題になるのではないかと。

Q 情報量が多く大変だったと思う。G Tへ期待していたこと、G Tと打ち合わせたことはどんなことか。

A G Tの方は何度も学校で子どもたちに話をしている経験があるので、洗濯板のよさと共に洗濯した時の大変さを話してもらうことを依頼した。また、子どもには他にもお手伝いがあったこと、隣近所の家が助け合っていたことなども話してもらうことにした。3人の方に依頼したので、それぞれの分担を決めて話してもらった。打ち合わせ会も何度ももった。本校では、単なるG Tではなく、授業支援の一つと考えており、ボランティアで年間延べ1, 000人位がかかわっている。

Q 単元の導入として大変参考になった。前時の洗濯体験はどうだったのか。

A 天候に恵まれ暖かい中での洗濯だったので、乾きもはやく、「寒くてつらくて大変」という体験にはならなかった。その点をG Tの方に補ってもらった。洗濯板は、家庭科で使う大きいものや小さいもの、また、昔クリーニング屋さんで使っていた郷土資料室のものを使った。

Q 洗濯をする前に、洗濯板を使うとどうかを予想させてみて、使った後の感想のズレから入るのも面白いのではないだろうか。

A 洗濯板を使う前は、洗濯機の方が汚れがよく落ちると思っていたところがある。体験を通して、予想にゆさぶりがあったと思われる。

Q どのようなねらいで「コの字形」の学習形態をとったのか。

A ディベートの方法を取り入れることも検討したが、コの字形はお互いの気付きをするのには適した形である。相手の顔、表情を見て意見を述べ合うことができるので、話し合いをしやすい。

○ 農家の仕事の道具からの導入で構想を立てていたが、導入に身近な洗濯板を使ったのは、取り組みやすいと感じた。

○ 3年生は「算盤」を学習するので、昔の算盤を導入に使ってもよいのではないかと。

単元名	「備前堀をつくった伊奈忠次」 授業者 水戸市立浜田小学校 教諭 田村 雅子		
司会者	龍ヶ崎市立大宮小学校 教諭 宮本 一利	記録者	古河市立小堤小学校 教諭 谷畑 威至

【提 案】

調べてきた備前堀について語る立場になることを通して、その歴史的価値や地域社会の環境における景観美、役割の重要性をとらえることができれば、備前堀を大切にしていきたいという思いが高まるであろう。

(1) 単元について

①「備前堀をつくった伊奈忠次」の教材化について

水戸を流れる備前堀を4年生の社会科教材として導入したのは、以下の理由からである。

- ・児童に身近な存在である備前堀は、先人の働きや努力があって完成し、今でも使われて続けている価値あるものであること。
 - ・今の浜田のまちが存在するのは備前堀ができたからであり、郷土の誇りであること。
 - ・家康の下で活躍した伊奈忠次という素晴らしい人物が手がけた最後の仕事であったこと。
- また、備前堀について記されている資料が少なかったため、茨城県立歴史館や埼玉県にある博物館や資料館、伊奈町役場、寺社等に足を運び、資料収集を行ったことで多くの事実を得ることができた。

②単元の目標を達成すべく実践してきたことについて

単元の目標に記される「地域社会に対する誇りと愛情をもつ」ことができるようにするために、以下のような工夫を行った。

- ・備前堀や忠次についての事実が児童自身でたくさん発見できるよう、備前堀の完成前と完成後の様子や工事の様子などを絵画化した。
- ・収集した資料をもとに『伊奈忠次物語』を授業者が創作し、備前堀や忠次についての理解が深まるよう活用した。
- ・備前堀保存会の方や市役所の方をGTとして招き、今の備前堀の姿になるまでの経緯などについて詳しく聞く機会を設けた。
- ・多くの事実を得た児童が備前堀や伊奈忠次への思いや願いをふくらませることができるようノートを活用したり話し合い活動を行ったりした。

(2) 本時の授業について

- ・児童がボランティアガイドとして語る立場になることで、備前堀の素晴らしさや語りたいこと(事実)、伝えたい思いをたくさん出すことができた。
- ・出てきた事実を3つの観点別に分けた際、「歴史」や「農業」については事実をまとめることができたが、「まちづくり」については予想していたまとめにもっていくのが難しく、授業者側でリードした形になった。
- ・児童が主体的に思いや願いをもって「地域社会に対する誇りと愛情をもつ」ことができるようにするには、短い時間では難しいと感じた。
- ・子どもの思いがノートによく書かれていたので、もっと採り上げて授業を展開していけばよかった。

【協議内容】

Q 「備前堀を大切にしていこうとする思い」という目標の評価方法は何か。

A 授業中の発表、ノートの記録、お世話になった人へのお礼の手紙などからも評価している。子どもの心の変容を授業の積み重ねで読み取っていき、個の育ちを大切にしている。

Q 児童の「書く力」が素晴らしい。どのような「書く」指導をしたのか。

A 聞き取り調査から知ったことや見て気付いたことなど、頭の中にある「知り得た情報」や「思い」を文章化させてきた。頭に知識として残るだけでなく、発表の際の安心感にもつながる。決められた時間の中でできるだけたくさん書くよう指導するだけでなく、担任のチェックや励ましの言葉を入れることで、書くことへの自信につながっているのだと思う。

Q 「ボランティアガイド」という設定である以上、「歴史・まちづくり・農業」3つの観点全てに通じる広い見方ができないといけないのではないか。

A 4年生という発達段階で、3つの観点全てを押さえて書き出していくことは難しい。全てを網羅していなくても、自分が押さえたいポイントや思いをはっきりさせてボランティアガイドの言葉として表現できれば4年生ではよいのでは、と考えている。子どもたちが備前堀を自分自身の見方で他の人に自慢できることが大切であると思う。今回の単元を高学年の歴史や総合的な学習にリンクさせていけば、広い見方ができると考える。実際に、5年生の総合的な学習の時間でも備前堀の追究を年間指導計画にも位置付けている。

○ 水戸市の浜田地区だからこそこの「備前堀」、地域に目が向くよい教材選択であると思う。

○ 総合的な学習の時間の「環境教育」にもつなげ、発展させてほしい内容である。

単元名	「社会を変える情報」 授業者 水戸市立浜田小学校 教諭 桑原 和彦		
司会者	茨城市立中郷第一小学校 教諭 塩野 淳子	記録者	古河市立仁連小学校 教諭 杉山 史康

【提 案】

- 単元構成について
 - ・選択肢として、災害時のネットワークと医療ネットワークがあった。今回は、3.11の震災があったことと、医療現場での見学が困難であることから、災害ネットワークで授業を組み立てた。
 - ・①～⑧時を「見える・分かる」、本時の⑨時を「みえる・わかる」として、授業を組み立てた。
- 本時の授業について
 - ・児童は、調べたことをもとに、現在の防災ネットワークへの安心感をパーセントで表現し、いろいろな意見を発表することができていた。
 - ・児童の意見をまとめあげる時間を十分に取らなかった。

【協議内容】

- 児童の姿勢が良い。学習のルールがしっかり身についている。
ノートを見せ合ったり、資料をさがしたりして、主体的に学習していた。
- Q 学習のきまりや資料の読み方の指導法について知りたい。
- A 全員書いて、全員発表を基本にしている。相談し合って、まねをして書いてもOKにしている。
資料に線を引かせ、ポイントを押さえるようにしている。
- 児童が自分の考えをよく発表していた。
- Q 「かわり」を深めるために、小グループでの活動をどう活用しているか。
- A ふだんから、3、4人の小グループで話し合う活動をよく取り入れている。
- 震災の時、情報が錯綜した。TV、ラジオに絞って授業を組み立てても良かったのではないか。
- Q 今回の授業で行っている「備え」は、震災の前後、どちらを想定しているのか。
- A 震災を経験しているので、次への備え、つまり震災の前を想定した。
- Q 児童の意見を「公助」「共助」「自助」の3つに分類したら、考えを整理し易かったのではないか。本時の授業の評価はどのようにするのか。
- A 今日の授業について、「公助」「共助」「自助」でまとめる意識はなかった。考えてみたい。
本時の評価は、後日、ノートを見たり、発表を思い出したりしてつける。
- Q 25%から上がった児童の変容の中身を知りたい。
- A 後で、ノートで確認してみる。
- 情報ネットワークの定義を広げてはどうか。(近所の人同士での情報のやりとりなど)
そうすれば、児童の考えが広がり、「公助」「共助」「自助」の考え方が出て、情報の双方向のやりとりがつかめるのではないか。
- Q 防災探検マップや紙芝居などでのまとめを発展として実施する予定はあるのか。
- A すぐには考えていない。児童の意見を聞いて実施するかを考えていきたい。
- ◎ 情報ネットワークの単元の実践例があったら、紹介してほしい。
- 「福祉」を取り上げた。ボタンやブザーを通してのお年寄りとのつながりをとらえた。
- 「医療ネットワーク」をとりあげた。ネットワークでどの病院が開いているかを探す活動を取り上げた。
- 「モラル」について学習した。一つの情報に関してたくさんのページがあり、それらを見比べる活動を行った。
- 双方向で行えるネットワークで、子供達も発信できるものを取り上げた。(通学路での不審者情報)「情報ネットワーク」を、事前と事後の2つに分けてとらえた。事前は、「どう暮らしに役立っていくか」として、事後は、「安全なくらしを守るために」である。
- Q 単元計画を作る際に参考になる書籍があれば紹介してほしい。
- A 特にないが、安野功先生の本は参考にさせていただいた。
書籍ではないが、国土交通省では、出前授業を行っており、今回の震災の対応に関わった人の話を聞くことができる。

単元名	「わたしたちの願いを実現する政治」 授業者 水戸市立浜田小学校 教諭 三浦 広興		
司会者	ひたちなか市立前渡小学校 教諭 嶋崎 光男	記録者	古河市立下辺見小学校 教諭 坪山 昌則

【提 案】

- (1) 政治の学習は、歴史の学習とは違うということで子どもたちは喜んで学習していた。
- (2) 関係図について
 - ・ 基本形の関係図を作ることがスムーズにできた。
 - ・ 調べたことやインタビューしてきたことなどについて授業で加筆修正することができた。
 - ・ 難しい言葉でも自信をもって書くことができた。
 - ・ 関係図を作った後にどのように質問したり説明したりするのかについては課題が残った。
- (3) 関係図をもとにした話し合いについて
 - ・ 子どもの意見が大変よくノートに書けていた。それぞれの機関が相互にかかわりあって直っていくということについてよくまとめられていた。
 - ・ 関係図によって、子どもたちの頭の中で筋道が整理されていた。
 - ・ 言葉を出したいがために教師主導になってしまった。子どもから出させる方法が課題である。
 - ・ 話し合いの中での大切な事項の取りあげ方をもっと研究したい。

【協議内容】

- Q 構造図が震災に入れ替えてあり、とてもタイムリーな課題である。子どもたちが興味関心をもって学習に入れる。ノートなど学習のあしあとから子どもたちがどのように成長してきているかということについて紹介してほしい。
- A 写真や工事の人たちが直しているのを見ているのは漢字の「見える」「分かる」になる。市長、市役所、建設会社の連携ということについてははじめは捉えられてなかったのが、「市役所と建設会社のコンビ」のような言葉や内容を捉えられてきているので、ひらがなの「みえる」「わかる」に近づいている。
- A 「みえる」「わかる」をまず考え、社会・友達・自分とのかかわりを考えて適当な題材はないか考えた。これからできる子育て支援センターではかかわりが薄いと思った。身近なもので驚きをもち、行くことができるものとした時、子どもたちが、通学路の復旧についてとても驚いて話している様子が見受けられた。それらのことから、テーマや子供の認識力の高まりの上でも適切だと思いこの学習が始まった。
- ◎ 政治の題材をやる時の導入の仕方の例などあったら紹介してほしい。
- A 水道局に勤める祖父が一週間家に帰って来られなかったという児童の話から、震災と生活を結びつけて考えることができた。
- A 調べたところごとのグループではなく、各グループから一人ずつ集めて混合のグループ編成をすると話し合いが活発になったのではないと思う。
- A 関係図は2学期から練習してきた。一人一人を生かすのには有効な形なのでこれからも取り入れていきたい。グループで取材してきたことを説明して、情報交換することによっていろいろな立場からの難しい言葉も分かるようにした。
- A 学級経営がしっかりされている。未復旧の文化センターなどと比べて、復旧の優先順位をはっきりさせればよく理解できたのではないかな。

研究 テーマ	「よりよい社会を築こうとする子どもを育てる社会科学習」 ～自ら考え判断し、進んで社会に働きかける力の育成～		
提案者	足利市立筑波小学校 教諭 柏瀬 順一	助言者	足利市教育委員会 指導主事 柏瀬 和彦
司会者	足利市立山辺小学校 教諭 池山 勝幸	記録者	足利市立久野小学校 教諭 増田 香代子

【提 案】

3年「工場の仕事の工夫」の授業実践をととして、以下のように研究に取り組んだ。

- (1)教材の開発・・・学区内にあり、児童がふだん履いている靴の製造工場を見学し、その工夫をマイシューズ作りにかすという学習活動を通して、受動的な学習でなく、能動的な見学となった。外国との結びつきなど今日的な課題も学習できた。児童が工場を身近に感じる事ができた。
- (2)学習過程の工夫・・・導入段階で児童が自分で考えたマイシューズを設計し、工場の見学後、マイシューズを再設計し、見学で得られた観点をいかせるようにした。工場の人たちの工夫を3色の付箋で意識させた。(機能：ピンク、デザイン：青、販売：黄色)
- (3)学習活動と支援・評価の工夫・・・グループのおすすめの靴をしあげる過程で協同的な学習を行った。話し合いの中で、友達から認められる場面があった。常に「工場見学のまとめ」を振り返り、工場で働く人々の思いを生かすようにした。学習状況を評価し、児童に意欲と自信をもたせた。
対象児を2人決め、学習への取り組みを観察したが、大きな変容が見られ、意欲的に取り組んでいる様子が見られた。(対象児がグループのおすすめの靴を考える場面で、付箋を活用しながら深く思考している場面が映像で流された。)

【協議内容】

Q 工場見学をはさんで、2回マイシューズの設計を行っているが、工場見学とどう結びつけたか。

A 1回目は自由な発想で作らせた。2回目では、見学で気づいた、つくる側の工夫を取り入れ、現実的な靴に修正するようにした。工場の工夫を強く意識させることができた。

Q 3色の付箋は、安全、機能、デザイン、の観点で分けられているが、5年生の工業の学習と3年生の学習との違いはどのようにとらえたのか。

A 5年生の工場の学習は「日本の工業」へと発展するもの。3年生はその地域に根ざしている工場というところがポイント。3年で酒造工場の見学を行い、原料の水に関心を持たせ、4年生での「水はどこから」という単元へ。そしてもとは酒屋でなく米問屋だったことから、5年生の米作りの学習へと発展性を持たせた単元の展開もある。

協議 どんな意図で「見学」を行い、どうまとめさせるか。

- ①きゅうりのハウス栽培の見学では、ハウスの衛生を保つために精密につくられている様子を詳しく見学させた。おいしいきゅうりをつくるための土づくりの工夫に気づかせることができた。
- ②納豆工場の見学の際に、行く前に課題意識を高めるため、自分達で納豆をつくり、食べ比べをするという活動を行った。自分でつくる納豆と、工場でつくる納豆のちがいから、工場の作り方の工夫に目をむけさせ、学習問題をつくることができた。
- ③トマト工場の見学で、排水を利用した和紙づくりを体験したことがある。この工場ならではの工夫や、意外性のある工場の活動に目をむけさせるという見学の仕方もある。

【指導助言】

社会科は出会いが大切。工場、ゲストティーチャー、子ども同士の考えの出会い。新学習指導要領のねらいを踏まえて研究が進められていた。教材の開発においては、足利の産業を支えてきた工場、子どもにとっては自分が履いている靴をつくっている工場という点で、とても意味があった。工場の工夫や努力に気づく驚きがあった。学習過程の工夫としては、マイシューズを作ろうと投げかけることによって自分との関わりについて考えることができた。ねらいを達成するための学びを絞りこめた。よりよいマイシューズを作る話し合いをさせることで言語活動の充実にもつながった。支援と評価においては、ワークシートやふり返しシートで子ども自身が学習過程を把握でき、同時に教師自身が学習状況をよく把握できた。子どもの実態をふまえ、子どもと工場との出会い直しを教師が行った。工場の生産における工夫や努力が理解でき、自分の生活にも必要であることが実感できる展開であった。

研究 テーマ	思考力・判断力・表現力を高める学習活動の工夫 ～言語活動の充実を通して～		
提案者	川口市立本町小学校 教諭 内山 達也	助言者	川口市立根岸小学校 校長 清水 健治
司会者	上尾市立尾山台小学校 教頭 山田 浩一	記録者	川口市立鳩ヶ谷小学校 教諭 北川 智之

【提 案】

I 研究主題とのかかわり II 研究の視点

III 研究の実際 単元名「2 住みよいくらし ②くらしと水」 IV 研究の成果と課題

【協議内容】

Q 8 時間目に相関図をつくるうえで、5. 6 時間目には、どのような活動を行ったのか。

A 水のイメージマップや写真資料（浄水場）を活用して調査した。

Q 水戸は今回の災害をもとに授業を展開したが、「いつでも安定した供給」という内容はいつ学習されたのか。

A 災害という視点では授業を展開していない。水のイメージマップ、川調べ、安全点検の様子、水不足の事例から実感を伴った学習を進めていった。

Q 行政の位置づけは、どのようにおさえたのか。

A 「人々」というなかに含まれている。

Q 相関図は、非常に有効である。かかわり合いや意識が見えやすい。「私たちの考え」を書かせていることがよい。論理的な思考を促していくうえで、どのような話型が必要なのか。

A 今回は、2 つの話型を用いた。根拠をもとに発言させるために、その2 つを選んだ。

Q 相関図は、これまでの関社研の大会でも取り入れられていた。関連づけしやすいが、どこまで児童の実感が伴うのだろうか。

A 活動の前に、体験的・作業的活動の時間をもって児童に実感させるようにしたい。

Q 論理的思考力を高める上で、教科書以外の資料や話型をどのように活用させたか。

A 1 時間 1 時間の授業のねらいをもとに、資料を精選した。また、型に当てはまらない児童は、他の児童が話したことをよく聞かせるなどして、身につけさせていった。

Q 相関図は個々の深まりがみられたが、グループではどのように深めていけるのか。

A 8 時間目で自分の考えをもったら、9 時間目でグループ・全体へと考えを広げていった。

Q 相関図のつくり方による違いや、意見のぶつかり合いはなかったか。

A 教室全体で話し合うなどして、結論を導き出した。

Q 学力診断テストにおいて、想像して書く問題において、誤答・無答が多かった。積み重ねていくことが力になる。

【指導助言】

○相関図について：様々な呼ばれ方をしているが、事象の関係を表したものである。事象間の結びつき、広がり、深まりを自己評価することができる。学習の前と後に組み入れることにより、それが視覚的にも見てとれる。

○学習カードについて：見通しをもったり振り返りを行ったりすることができ、学習の自己評価をすることができる。また、次の時間に向けて考えることで、学習計画力をもたせることもできる。

○言語活動の充実：言語活動の充実は、思考力・判断力・表現力向上につながり、本時の目標が達成しやすくなる。より高い学習内容の定着が図れる。言語活動はその手段であり、言葉による表現と文字による表現が大切である。人の思いが込められている言葉は、知識と相まって共感的・実感的な理解へと至ることができる。さらに、学習問題の工夫が大切である。資料活用能力を高める「どのように～」、「どのような～」型。思考力を高める「なぜ、～」、「どうして、～」型が、社会的意義や背景を探ることにつながる。判断力を育てる「～を、どうしたらよいか」、「どちらが～」型は、社会への参加や参画について考える力を育てる事につながる。

○思考力を深める手立て：考える社会科を展開するうえで、結果から原因を考えたり、逆に原因から結果を考えたりすることが大切である。「見える」ものから「みえる」ものを見つけるためには、教師の「ゆさぶり」、子どもの意識や視点を変える資料提示が必要である。子どもたちを学習に引き込む手立てが求められる。

○話型について：思考が深められるように、「なぜなら、～」「まとめると、～」「具体的には、～」といった話型も大切にしたい。また、これからは説明力も求められており「説得力」と「納得力」が必要である。そのためには、きちんとした根拠が必要であり、自分の考えと比較しながら考える力が必要である。社会的な見方や考え方を出し合える話し合い活動が大切である。

研究 テーマ	「かかわりの中から学び合い、進んで社会や人とつながる子どもが育つ社会科学習」 ～第5学年 単元「情報と社会」の学習を通して～		
提案者	日立市立台原中学校 教諭 杉澤 季展	助言者	日立市教育委員会 指導主事 高橋 重樹
司会者	常陸太田市立山田小学校 教諭 和田 秀彦	記録者	高萩市立君田小学校 教諭 富山 明子

【提 案】

- ・学習対象者とのつながり・かかわりを大切にする単元構成
- (1) 体験的な活動において 学習対象者とのかかわりから「みえる」「わかる」に繋げる。
- (2) 単元計画の工夫 市報への関心から3つのかかわり（市報作成者・家族・友だち）をもち、調べる意欲を高める。
- (3) 授業展開の工夫 市報作成者とのかかわりから、情報発信の役割、責任に気づく。

【協議内容】

(1) 質問と感想

Q 市報という身近なメディアを使うことで、子どもは、どのように変容したか。

A 授業前は市報を見たことはあるが、内容は分からないという児度が多かった。授業後は、市報の内容に関する話題が日常会話の中に出るようになった。

Q 「かかわり」を計画するときの難しさは何か。

A 事前準備は綿密に行う。市報の作り方を学ぶのではなく、作成者の苦勞を知るのがメイン。そのためのインタビューを考えさせるようにする。家族とのかかわりを図り、家での市報探しから。友だちとのかかわりとしては、市報について話合う場を設定した。

(2) 学習材として身近なものを取り扱った授業例について

- ・いつもは教科書で学習をしているが、身近な物を取り上げれば、児童の取り組み方が積極的になる。
- ・毎年NHK水戸放送局に行っていたが、もっと身近な学区内の市役所で作成している市報に学習材を代えることで、情報をもっと身近に感じられるのではないか。
- ・3, 4年生で市や県を扱い、5, 6年では国レベルの学習になるのが通常だが、あえて地域の市報で「情報」を学習するという取り組みは、斬新だった。
- ・市報もよい教材である。自分たちが掲載される可能性が高い。

(3) 社会科情報教育の小中の関連について

- ・携帯電話については、かなりの所持率になっている。情報の知識については、子どもと教師の関係が逆転しはしないか。子どもの方が、情報を活用する技術に優れている。
- ・情報モラルはしっかり取り上げるべき。情報の授業はその土台である。

【指導助言】

(1) 情報単元で大切にしたいこと

- ・新学習指導要領では、学習テーマが通信から情報産業や情報化した社会の様子に代わった。
- ・情報産業に従事している人の工夫や努力は学習の主ではない（見学から調査への変更）。
- ・新学習指導要領でも「情報が国民生活に大きな影響を与えること」「情報の有効な活用」を学習することは変わらない。持続可能な社会の実現のため、負の側面を知って情報の有効活用することの大切さを学習し、よりよい社会の形成者を育成することが大切である。

(2) 提案について

- ・「人、物、事」が詰まっている。全家庭に配付される、全員がそろえられる教材である。
- ・かかわりの強い情報誌であり、子ども自身が関われる「つながり」がもてる教材である。

(3) 提案をこれからの授業に活かすために

- ・市報を他のマスメディア（放送、新聞など）と意図的に関連させることを考えたい。
- ・広報誌だけで不十分な緊急情報などに関連させ情報ネットワークの単元と、また6年生の「政治のはたらき」の単元の学習につながる指導計画を考えたい。

研究テーマ	「法やきまりに対する関心を高め、社会や自分とのかかわりについて考える力を高める学習過程の工夫」 ～法律専門家をゲストティーチャーに迎えた日本国憲法の授業を通して～		
提案者	ひたちなか市立外野小学校 教諭 松本 恵	助言者	ひたちなか市教育委員会 指導主事 関口 拓生
司会者	ひたちなか市立前渡小学校 教諭 嶋崎 光男	記録者	ひたちなか市立那珂湊第二小学校 教諭 押野 恭子

【提 案】

(1) 学習過程の工夫

児童が学習の対象である憲法を身近なこととしてとらえ、かかわっていけるように学習過程を工夫した。まず、導入として仮想国を設定し、国王が登場して国民（児童）に対して独裁的な態度で振る舞うゲームを行う。この体験のあと、国王の言動の問題点を話し合い、よりよい国づくりのために国のきまりはどうあるべきかという問題意識をもてるようにした。そして、国王に対して自分たちの考えを訴えるために、日本国憲法を調べていこうという学習問題へとつなげていった。日本国憲法の三つの原則について調べ学習を行ったのち、単元のまとめでは、調べたことをもとによりよい国をつくるためにはどのようなきまりが必要か話し合い、再び国王が登場して児童が考えたきまりを国王に直接提案する場を設けた。

(2) 交流する場の設定

調べ学習では、まず、三つの原則のうち自分の興味をもった内容について各自で調べ、次に同じ原則を調べたもの同士で集まり、調べたことを交流した。さらに、次の時間には、グループの中にそれぞれ三つの原則を調べた児童が入るようにして、互いに意見を交流し合った。学習者同士のかかわりを通して、知識を広めたり、考えを深めたりできるようにした。

(3) 法律専門家を迎えての効果

単元の導入とまとめの時間にG Tとして、法律専門家を迎えた。児童に対して専門的な助言や学習を方向付ける話、憲法の補足説明などをしていただいたことにより、憲法の働きをより理解することができた。

【協議内容】

- Q 子どもたちに、実生活における憲法の存在に気付かせるためのどのような手立てをしたか。
 A 子どもたちの実生活が憲法とどのような結びつきがあるか考えさせるために、日本国憲法の三原則について具体的に調べる時間を確保した。
 Q 日本国憲法の条文との関連をどのようにもたせたのか。
 A 調べ学習で、専門的な図書を活用して条文を調べていた児童が何名かいた。調べたことの交流会で条文を調べた友だちの発表を聞いて他の児童も憲法の条文を知ることができた。
 Q 学習過程の工夫のアイデアをどのように生み出したのか。
 A 今回の授業で行った国王ゲームは、法律専門家が小中学生向けに行っている法律教室で実践していたものを参考に、法律専門家と教員が協力してつくった授業として活かされる教材である。
 ○ 中学校でも活用できる教材だと思う。中学校では、憲法に続いて議会についても学習するので、国王と議会が対立するような場面があると授業がおもしろくなるのではないかな。

※ 弁護士からのビデオメッセージ

これからの法教育では、憲法の原則を知識として伝えるだけでなく、その意味するところや精神、具体的な問題に対する考え方を伝えていきたい。茨城県弁護士会では、小中学校から要請があれば弁護士を派遣しているので、ぜひ弁護士との連携を考えてほしい。

【指導助言】

(1) 社会科で大切にしたいこと

- ① 社会参加意識を高める工夫をする。
- ② 社会的な思考力・判断力・表現力を育てるために、考えたことを表現するという視点を忘れない。相手に自分の考えを伝えたり、自分の考えを出し合ったりする場をつくる。
- ③ 子どもたちが単元の最初に考えたことから、単元の最後に考えが深まったり、認識を新たにもったりすることができるようなストーリー性をもった授業づくりが必要である。
- ④ 体験活動を重視する。言語化を図って確実な経験となるようにすることが大切である。

(2) 法教育の目的について

法的知識を習得させることが目的ではない。相手の人格を尊重しつつ、自分の意見を表明し、相手や第三者の意見を聞き、討論し、必要であれば自分の意見を修正し、また相手の意見を修正するよう説得して、合意を得る態度や技能の育成、その結果として新しいルールをつくる能力を育てることである。

【分科会】

第2会場 水戸市立常磐小学校



〒 310-0044

茨城県水戸市西原1丁目3-12

TEL 029-224-2272

FAX 029-224-2273

E-mail tokiwa-e@magokoro.ed.jp

<http://www.magokoro.ed.jp/tokiwa-e/>

校長 大嶺 和彦

(日程)

11:45	13:20	14:05	14:20	15:05	15:15	16:25
移動・昼食	公開授業	休憩	学年別 授業研究会	休憩	学年別 課題研究会	

(公開授業・学年別授業研究会)

学 級	授 業 者	単 元 名	司会者	記録者
3年1組	奥川 芳子	古い道具と昔の暮らし	茨城町立石崎小学校 教諭 瀬谷 誠	坂東市立生子菅小学校 教諭 関根 賢一
4年3組	宮田 直実	弘道館をつくった「徳川斉昭」	行方市立大和第三小学校 教諭 宮内 康夫	坂東市立長須小学校 教諭 茂呂 大樹
5年2組	山口 恵子	わたしたちの生活と環境 ～わたしたちの生活と千波湖～	北茨城市立明德小学校 教諭 花園 隆一	坂東市立弓馬田小学校 教諭 笹田 秀夫
6年2組	平山 智己	わたしたちの生活と政治	稲敷市立阿波小学校 教諭 木村 寿	坂東市立七重小学校 教諭 鶴見 卓彦

(学年別課題研究会)

学年	提案者		司会者	助言者	記録者
3年	神奈川	横浜市立本郷台小学校 教諭 樋渡 由希恵	横浜市立川和東小学校 教諭 寺岡 徹	横浜市立藤が丘小学校 校長 藤馬 享	横浜市立菊名小学校 教諭 宮野 憲一郎
4年	茨城	神栖市立大野原小学校 教諭 飯田 直樹	鉾田市立巴第一小学校 教諭 岩城 和久	水戸教育事務所 学校教育課長 勝村 登	行方市立玉造西小学校 教諭 飯田 浩彦
5年	東京	世田谷区立松沢小学校 教諭 佐藤 真至 新宿区立四谷小学校 教諭 北中 啓勝	大田区立入新井第二小学校 校長 嶋田 英樹	世田谷区立松原小学校 校長 小林 巧	小平市立小平第六小学校 教諭 櫻井 正義
6年	茨城	稲敷市立古渡小学校 教諭 駒澤 悦郎	稲敷市立あずま南小学校 教諭 星 充	石岡市教育委員会 指導主事 會田 照行	稲敷市立沼里小学校 教諭 松島 正典

社会とのかかわりを大切にし、自らの考えを創り出す力を育む社会科学習
— 共に学び合い、広げ合う活動の工夫を通して —

本校は、関小社の授業公開校としての次の視点を定め、研究を進めてきた。

- ① 地域素材や人財とのかかわりを生かした、多面的な追求を可能にする授業実践
- ② 効果的な体験、見学、調べ活動をもとにした、事実に基づいた自分の考えの整理
- ③ 話し合い活動を通じた、学習者同士のかかわりと自分自身への問い直しによる思考の深まり

1 公開授業の様子

【第3学年】

「古い道具と昔の暮らし」の単元において、地域の高齢者をはじめとする、様々な方々に協力を得ながら行った学習を公開した。

【第4学年】

「弘道館をつくった徳川斉昭」という単元を開発し徳川斉昭を教材化した。『水戸に息づく徳川斉昭』という自作資料（冊子）が有効活用された。

【第5学年】

「わたしたちの生活と環境～わたしたちの生活と千波湖」という単元を開発し、千波湖を教材化し、公開した。児童の体験的な調べ学習や調査が、話し合い活動に有効であった。

【第6学年】

「わたしたちの生活と政治」は、地域教材として、常磐小学校に併設された常磐市民センターをとりあげた。建設までの経緯を地域の方々や関係者からの聞き取りや調査から資料としてまとめ、政治学習の話し合いの基礎とした。

2 学年別授業研究会の様子

学年ごとの発達の違い、発表形式の違いはあるが、自分の考えを、事実をもとに論拠だてて話せたこと、友達の考えをしっかりと聞き、自分への問い直しとし、考えることができたことへの質疑感想が多かった。

本研究を通し、地域の教材化を図ってきた。児童が地域と深くかかわることで、地域理解のみならず、学習意欲の向上へとつながった。しかし、有益な地域素材は多種多様であり、教材化する余地はたくさん残っている。今後は、地域とのつながりをさらに深めながら、教材化を図る必要がある。

本校公開授業へは、関東各地から数多くの先生方に参加いただき、協議会では貴重なご意見をいただけたことに深く感謝いたします。

文責（ 小林 幹夫 ）



单元名	「古い道具と昔の暮らし」 授業者 水戸市立常磐小学校 教諭 奥川 芳子		
司会者	茨城町立石崎小学校 教諭 瀬谷 誠	記録者	坂東市立生子菅小学校 教諭 関根 賢一

【提 案】

郷土資料室にある地域の人々から寄贈された道具を見て考えたり、水戸市立博物館の昔の道具の出前授業を受けたりすることで児童自らが課題を持ち、意欲的に授業を進められると考えた。今の時代と比較しながら祖父母の子ども時代（戦前も含む）、父母の子ども時代の道具について調べることで、道具の変化が暮らしの変化を伴ってきたことに気付き、聞き取り調査を通して、よりよい暮らしをしたい人々の願いが道具を変化させ続けてきたことをとらえさせたい。

大会主題の「見える」「わかる」ための3つの「かかわり」を大切にする授業の展開は、

(1) 「学習の対象」とのかかわり

- ・地域とのかかわりは難しいところもあるが、かかわりは大きい。生活科からの流れを大切にしたい。郷土資料室の道具類、博物館の出前授業など、いろいろな体験をしてきた。

(2) 「学習者同士」のかかわり

- ・この項目を重点的に取り組んだ。子どもたちは、「話し合う」ことが苦手で意見がつながらなかったため、グループでの話し合いを取り入れ、認め合ったりしながら全体へと場を広げていった。この時気を付けたことは
 - ①自分の意見に根拠を持たせること…「なぜ？」と言うことばで切り返しさせた。
 - ②話をつなぐこと…先生→児童から児童→児童への変換、～と同じ、～と違うことを意識させた。発言者の明確化や振り返りの時は意図的指名を行った。

(3) 「自分」とのかかわり

- ・振り返りの時、変容を確認し認めた。「初めて知った。」「～ことに気付いた。」など、ノートやワークシートに自分のことばで書いている。

【協議内容】

Q 昔の道具の良さを、当時の人の話や近所の人たちとの会話から分かるようになっていた。つながりをよく考えた授業である。他の経験や体験させたことがあれば教えてほしい。

A 七輪で火をおこすことを体験させた。自分たちだけでは、全く火が付けられなかった。

Q 時間的な配分も難しいと思うが、まとめの発表を3人選出した理由を教えてください。

A 変容や気付きをつかませたい。初めて知った、道具と暮らしなどキーワードとなった。

○落ち着いた雰囲気の中で授業が進められていた。暮らしがどう変わってきたかという課題での授業だったので、楽になったこと・便利になったことを「暮らし」「道具」などのことばを使って発表させたり、まとめさせても良かったのではないかな。また、祖父母の話で良さに目を向けさせるという方法もあったのではないかな。

○博物館体験は、本校も実施し有意義だった。今後は地域協力、地域教育力を生かして「みえる」「わかる」授業につなげていきたい。発表は、ペアやグループで自分の意見を述べさせても良かったのではないかな。また、板書事項には、現在のよさだけでなく、昔のよさもあればさらによかった。

○導入の五右衛門風呂のVTRに知っているおじいちゃんが出てきて盛り上がった。お世話になった人や地域の人たちがたくさん協力しているところが素晴らしい。まとめ方が、参考になった。具体物を操作させて昔と今のものを比較させてもおもしろかった。

協議の柱となった「ねらいにかかわる具体的な手立てや資料の活用」について

- ・地域素材は、多角的且つ多様に準備したい。
- ・地域人材は、写真やVTRを活用することで関心意欲の向上につながる。
- ・話し合いのポイントは教師が意図し、学び合いにつなげたい。
- ・素材としての地域を知らない教師もいる。本人の努力も必要だが、協力するチームも必要である。
- ・実物を準備できる地域がうらやましい。昔のものが集められない地域もある。

単元名	「弘道館をつくった『徳川斉昭』」 授業者 水戸市立常磐小学校 教諭 宮田 直実		
司会者	行方市立大和第三小学校 教諭 宮内 康夫	記録者	坂東市立長須小学校 教諭 茂呂 大樹

【提 案】

地域にある偕楽園を導入で扱い、「偕楽園は誰がつくったか。」「何のための施設なのか。」と問いかけることで児童に興味をもたせていく。偕楽園と一対である弘道館を身近なものとしてとらえることができれば、関心をもって意欲的に学習に取り組むことができる考える。

次に、藩校を作った徳川斉昭の考えに迫るために、敷地図やパンフレットを読む、弘道館を見学する、歴史の専門家に取材するなど、児童自らが具体的に調べられるものを準備しておく。児童は「読む」、「見る」、「聞く」といった様々ななかかわりを主体的に重ね、見えてきたことや分かったことを自分なりの言葉で表現することができる考える。4年生の児童がそのまま活用できる郷土資料は数少ないが、それらを整理し集めておくことで、児童の主体的な活動を促すことができるであろう。

その後、分かったことをもとになぜ弘道館をつくったかについて全員で話し合う場を設ける。異なった視点から調べたもの同士が話し合うことで、斉昭の工夫や苦心、考えに着目させたい。これらを通して、教育を発展させようとした斉昭の願いに迫り、地域社会に対する誇りと愛着を育てていきたい。そしてそのことは、今求められている伝統や文化を尊重する教育として重要であると考ええる。

【協議内容】

○授業者からの課題

- ・資料の準備や選択が難しい。(児童が理解できる資料が少ない。)
- ・調べ学習を進めていくと、専門的なことが出てくる。
 ⇨ どこまで教師が準備したらよいか分らず不安である。
- ・専門機関、関係機関との連携をどう図っていくか。(連絡・調整する時間の確保等)

Q なぜ、光圀ではなく、斉昭を取り上げたのか。

- A ①光圀は、以前から扱っていた。斉昭の考えが水戸市の教育理念(文武一致の精神)と通ずるものがあるから。
②斉昭が教育を重視していて、弘道館の設立が学問の発展につながっていた。

Q 保護者へのはたらきかけはどのように行ったのか。

- A 児童から保護者へ依頼することも多かった。担任から依頼(電話連絡)をする場合には、保護者に学校から連絡があったとは子どもには伝えないようにお願いし、児童の調べ学習への協力を依頼した。自主的に調べているという気持ちを高められるよう配慮した。

Q 子どもへの意欲付けはどのように行ったのか。

- A ①学校全体の協力。(いろいろな先生方からの言葉かけ等)
②関係機関(歴史館、植物園、図書館等)への事前の連絡。
 ⇨ 資料を提供していただいたり、お話をいただいたりした。

- 子どもたち自身で資料を集めてきたことがすばらしい。
- 学ぶ意欲が育まれていた。⇨ 多少難しい資料でも問題ないのではないか。
- 自分の考えに根拠をもたせて発表していた。
- 学校全体の取り組みが見られた授業だった。
- 児童から出た考えを全体に紹介する(共有する)場面があると、さらによかったのではないか。

単元名	「わたしたちの生活と環境」 ～わたしたちの生活と千波湖～ 授業者 水戸市立常磐小学校 教諭 山口 恵子		
司会者	北茨城市立明德小学校 教諭 花園 隆一	記録者	坂東市立弓馬田小学校 教諭 笹田 秀夫

【提 案】

(1) 「学習の対象」との「かかわり」

何を学習材として掘り出し、何を教材化していくのか。子どもたちとどのような出会いの場を設定するのかを考えて、本単元を構成した。第3学期の学習に「わたしたちの生活と環境」がある。教科書では京都市の鴨川を事例に、水質の浄化の取り組みについて学習する。水戸市には、那珂川、千波湖がある。最近、千波湖の水質は、少しきれいになってきているが、以前は汚れがひどい時期があった。そこで、千波湖を題材に地域教材化できないかと考えて、今回の授業を組み立ててみた。単元を構成するにあたっては、資料の収集や導入の工夫を中心に考えてみた。特に、導入の工夫では、子どもたちが、“なぜ”、“どうして”、“もっと知りたい”と思えるような千波湖に出会わせられるように考えた。

(2) 「学習者同士」の「かかわり」

導入と追究活動の部分で、特に、学習者同士のかかわりが大事になってくると考えた。導入の部分では、写真やグラフをもとにお互いの考えを交流させることで、単元を貫く「千波湖は、どうしてきれいになってきたのだろう」という学習課題をつくった。そして、自分たちで千波湖について調べ学習を進めた。調べてきたことをもとに学級全体で話し合うことで、多様な考えが生まれる。子どもたち同士のやりとりで、考えを深められるようにする授業を実践してきた。話し合い活動を行う上で、以下の2点を、子どもたちに指導した。

ア 根拠をもって発言をすること

思いつきだけではなく、「なぜそう思う、どこからそのことを知ったの」を繰り返すことによって、少しずつ根拠をもって発言ができるようになってきた。

イ 話をつなげる、広げること

子どもたち同士が指名し合いながら、自分の考えを発表させた。そして、友達の発言を受けて、さらに考えを広められることを目指してきた。その際には、ネームカードを利用して、板書を行うことによって、子どもたちが黒板を見て、発表者が誰なのかや話し合いの流れがわかるようにした。

(3) 「自分」との「かかわり」

自分の考えを自分の言葉で表現していくことができるように、毎時間ごとに自分の言葉で、わかったこと、思ったことなどを書くように指導してきた。そして、話し合いの後では、友達とのかかわりから、自分の考えが変わってきたことを実感することができた。また、話し合い活動の中で、何も発言できない子でも、何も考えていないわけではなく、自分の言葉でノートにまとめていた。

【協議内容】

Q 子どもたち一人一人が自分の考えを持ち、資料をもとに発表していて素晴らしかった。ただ、まとめの段階において、子どもの発表だけでなく、何かしら教師側の手立てが必要だったのではないか。

A あまりおさえてしまうと、教師のまとめになってしまう心配があったので、サラリとまとめてしまった。もう少し大切な言葉をおさえて、まとめていくべきであった。

Q 限られた時間で、教科書にある京都の鴨川の事例を、どうまとめていくのか。

A 鴨川の事例と自分たちが学習した千波湖とを結びつけながら、まとめていきたい。

Q 全体での話し合い活動の場において、話し合いに参加できない子にどんな支援をしているのか。

A 少人数グループで、誰もが話せるようにしたり、また、多数決で手を挙げさせ、自分の意思表示をさせたりした。また、近くの席の友達と相談をさせるなどしている。

Q 本単元のまとめとして、どのようなまとめ方をしていくのか。

A 今まで学習してきたことを活かして、自分たちの生活と自然環境が密接にかかわっていることや、自分たちが環境を守るためにできることを行っていくという意識を持てるようなまとめをしたい。

単元名	「わたしたちの生活と政治」 授業者 水戸市立常磐小学校 教諭 平山 智己		
司会者	稲敷市立阿波小学校 教諭 木村 寿	記録者	坂東市立七重小学校 教諭 鶴見 卓彦

【提 案】

(1) 研究主題とのかかわり

- ①「学習対象」とのかかわり…「市民センター」と政治について学習内容である。市民センターは本校に隣接して昨年8月に完成し、身近な施設であるが、児童にとって分からないことが多いものであるので学習材として選んだ。
- ②「人」とのかかわり…学び合う友だちや聞き取り調査をした地域の利用者のみなさんとの関わりがもてる内容である。
- ③「自分」とのかかわり…学習カードを工夫し、児童の考えが蓄積できるようにした。黄色の付箋には友だちの意見やメモを書き、新たな考えを生み出せるようにした。

(2) 授業づくりの課題

- ・多様な見方、考え方を引き出すために調べ学習に力を入れた。本時の学習では自分の考えに固執する児童が多かったため、教師は意見をまとめるようにした。
- ・市役所や市議会の人々の気持ちなど建設にかかわった人々の気持ちにもう少し焦点を当てたかった。
- ・政治の資料は難しいので、ファイルに作り直した。特にインタビュー内容は児童に分かりやすい文章表現にした。
- 話し合い活動の工夫
 - ・地域住民の願いとそれらを実現するために税金などを集めている市とのかかわりを重視した。
 - ・児童同士の意見交換やつなぎは少しできた。反対意見もよく出ていたが、偏りがあまりないように支援した。話し方の指導はいろいろなテーマで、いろいろな場で行うようにした。

【協議内容】

- 赤の付箋に自分の考えをしっかりと書くことができていた。話し合いでは3つの立場のバランスがとれていた。児童は他の立場の意見をきちんと聞いて発言しており、素晴らしい。
- Q付箋を使った学習カードやノートの活用について知りたい。
- A学習カードはいくつかの単元で行ったが、その他の単元でもノートに自分の考えを書かせることを重視した。
- Q学習計画の学習問題は児童が作ったのか。
- A中心となる課題は児童から出てきた。「どのように」「なぜ」という建設までの過程や学校の隣に作った理由にこだわらせた。
- Q板書の構成図が図式化されていた。他の学年の板書でも図式化されたものがあったので、意図的に行っているのか。
- Aかかわり合いが見えるように、意見のつながりが分かるように板書している。練り合いによって、つながり、かかわり合いが分かるようにした。
- Q指導案の本時の学習課題には「一番」ということばがあったが、授業の学習課題にはそれがなかったのはなぜか。
- A「一番」という言葉があると自分の考えにこだわるができると思ったが、他学級の授業研究から「一番」というと答えが一つだと考えてしまう児童が多いことが分かったため、本時の授業では「一番」を入れなかった。
- Q市議会の立場を理解させるには、事前に「市議会の役割や議員の選挙」について学習しておいた方がよかったのではないかな。
- A選挙についてはまだ学習していない。次の国会の学習で市と比較しながら指導する予定である。
- 市役所と市議会の役割の違いは難しかったが、次の「国の政治」の学習に生かされると思う。
- Q本時のまとめが教師の板書で終わったので、児童もノートに書かせた方がよかったのではないかな。
- A時間の都合上、教師のまとめで終わったので、次時に書かせる予定である。
- Q話し合いの中で「いろいろな人々の協力で」という意見が出たが、その後また、自分の意見の出し合いになったので、切り返しの発問をしておくよかったのではないかな。
- Aもう少し他の意見を聞きたかったため、そのまま続けさせた。反論によって深まるようにしたかったため、切り返しはせず、児童に任せた。
- 話し合いで教師は自分の考えを入れずに話し合いをコントロールしていてよかった。反対意見を言いやすい雰囲気であったので、学級集団としてのまとまりを感じた。
- Q学習形態は普段どのようにしているのか。
- A本時のような一斉の向き合いは2学期末から取り入れた。コの字型など空間が広いと緊張してしまうので、本時のようにすると小グループ感覚で気軽に話しやすい。
- Q児童が相互指名をしていたが、意図的指名の方が効果的ではないかな。
- A教師が主導すると子どもたちは挙手しにくいので、相互指名の方が気軽に話せる。より多くの児童に発言させるように、さらに児童同士でつないでいくようにしたい。
- 相互指名でも事前にお互いの意見が分かっているとさらに効果的だろう。話し合いの前段階での把握が大切である。

研究 テーマ	子どもが社会事象を自分とのかかわりでとらえ、主体的に追究する授業をどう創ったらよいのか 「わくわく☆T工場たんけんたい ～わたしたちのまちの大きい工場～」		
提案者	横浜市立本郷台小学校 教諭 樋渡 由希恵	助言者	横浜市立藤が丘小学校 校長 藤馬 享
司会者	横浜市立川和東小学校 教諭 寺岡 徹	記録者	横浜市立菊名小学校 教諭 宮野 憲一郎

【提 案】

(1) 社会事象としてのT工場

① 3年生にとっての教材とは

- ・身近な人に出会い、ふれあえること、体験活動を取り入れやすいこと、そして、繰り返し調査活動を行いやすいことなどが特徴である。

② 教材化したT工場

- ・T工場は、学校の正門の目の前にあるガソリン計量器をつくっている巨大な工場で、世界3大計量器メーカーである。しかし、子どもたちの普段の生活と直結しているとは言い難い。

(2) 自分とのかかわりでとらえ、主体的に追究する授業をつくるために

T工場を子どもの身近に引き寄せ、自分ごととしてとらえることができるように以下のような手だてを考え、実施した。

① ガソリン計量器を身近に感じられるようにする。

- ・保護者との連携
- ・ガソリンスタンドでの給油の仕方の疑似体験
- ・ノズル体験

② ワークシートを手掛かりに、学習内容を焦点化する。(見学1回目)

- ・ワークシートの活用

工場の工程をわかりやすくするために、書き込み式のワークシートを活用し、見学の視点を焦点化した。

③ 学習問題をもち、見学の視点を「検査」にしばる(見学2回目)

- ・検査の多さと検査の内容に注目させることで、T工場の「安全性・正確さ」という一番大切にしていることに追究が絞られるようにした。

④ 主体的な活動を支えるインタビュー活動

- ・まちたんけんとのつながりを重視し、まちたんけんでもインタビューできるようにした。
- ・単元を通し、ガソリンスタンドへもインタビューできるようにした。
- ・電話でのインタビューから追究をスタートし、実際に出かける活動を増やしていった。

⑤ 授業での豊かな学び合いを生むために

- ・座席表の活用
- ・マインドマップを使った板書
- ・実物資料の活用

【協議内容】

Q 横浜市では副読本のようなものをつくって市内で生産単元を考えることはしないのか。

A 副読本はあるが、本校の子たちは知らない場所のことが書いてあることもある。

Q 5年生の工業の学習との違いをどう考えるか。

A 横浜市の評価規準をもとにこの教材の単元化を行った。そこから外れないようにした。

【講師指導】

○ 横浜市の広さを考えると、3年生にとっては学校ごとに教材をつくっていくことが多い。

○ 3年生にとって工場見学は視点が広がってしまい、追究が拡散してしまう。そこで、今回のようにワークシートを使って視点を絞り、追究を狭めることで見方・考え方も深まっていく。

○ 座席表を使って子どもたちの思いや関心を把握した上で授業をつくっていくことが大切になる。

研究 テーマ	「かかわり」を大切にして、「みえる」「わかる」子どもが育つ社会科学習の創造 ～ 第4学年「大野原開拓」の歴史を探ろう の実践を通して ～		
提案者	神栖市立大野原小学校 教諭 飯田 直樹	助言者	水戸教育事務所 学校教育課長 勝村 登
司会者	鉾田市立巴第一小学校 教諭 岩城 和久	記録者	行方市立玉造西小学校 教諭 飯田 浩彦

【提 案】

神栖市大野原地区は現在、道路が区画整備され住宅が立ち並ぶなど繁華街を擁す中、人口も増加傾向にある。しかし、この地には土着の人は少なく、「大野原開拓」として他地区から移住された人々で構成されていることを、児童・保護者で知っている者はほとんどいない。そこで、「大野原開拓の歴史」を教材化して、本研究の目指す「みえる」「わかる」子どもの姿に迫ろうと考えた。また、「人」「もの」「こと」とのかかわりを通して、先人の働きと今の自分とのつながりが「みえる」「わかる」子どもに育てたいと考えた。

(1)「学習対象」とのかかわり～石碑（開墾碑）を通して～

(2)「学習者同士」のかかわり～学習のまとめにおける児童間のかかわりを通して～

(3) 自分とのかかわり

学習ノートから…先人への感謝の気持ちを踏まえながら、物や食べ物を大切にしたい、いろいろなことにチャレンジしたい、たくさん努力したい等、これから自分がどうしていききたいのか自分の言葉で表現することができた。

(4)「その他」とのかかわり

(5) 研究の成果

様々な人やものとのかかわりを通して、大野原地区の人々の生活の向上に尽くした先人の願いや苦心が分かり、先人の働きが地域の人々の生活の向上に大きな影響を及ぼしたことに気付くことができた。また、大野原開拓の歴史を理解し、これまでの自分の姿や今後の自分の在り方について、文章で表現することができた。

【協議内容】

Q 神栖市の歴史民俗博物館をどのように活用したのか。

A 事前に資料収集に行ったが、必要な資料は残されていなかった。そのため、「神栖町史」は準備したものの、難易語句が多かったため、内容を平易な文章に直して提示した。

Q 写真資料から、滑走路跡が認められるが、児童には滑走路の存在については触れたのか。

A 「大野原のおいたち」という資料の記述の中で、軍事施設の存在を知った。

Q 地名の由来について、地図を提示するとき、いつの時期のものかを伝えながら行くと、より判断しやすくなる。どのような準備をされたのか。

A 写真資料について、市役所で手に入れることができ、20年間隔のものを提示した。児童は、市街が発展していく様子をとらえることができた。

Q 文献資料の提示で、児童が注目した点や教師が力点をおいたところはどこか。

A なぜ開拓をする必要があったのかを気付かせたかった。石碑には昔の様子が書かれていたので、様子が想像できたのではないか。

Q 30%という少ない祖父母から、どのように他の児童へ伝えたのか。

A 開拓当初から存命な方は1,2名で、祖父母はその後の人たちになる。具体的に聞いたことは、少なかった。

Q 年中行事に進んで参加する児童を、どう育てているか。

A 現存する年中行事は、ほとんど行われていないことに気付くといった状況である。

Q 年中行事のほかに、古くから残される習わしには、どのようなものがあるか。

A 息栖神社、神ノ池の昔話、孫渡しなど。

【講師指導】

成果 ○積極的に地域の素材を活用している。

○子どもの学習意欲を引き出すための工夫がされていた。(写真・資料)

課題 ○先人の業績から苦心を学習するところであったが、開拓とほぼ同時期興った鹿島開発で、初志に反する発展を遂げていくという難しい地域をあえて題材に選び、開拓していった人々の思いをとらえていった授業者に敬意を表したい。

○学習のまとめがもっと幅広くてもよい。(劇・新聞づくりなど)

○この実践を、近隣小・中学校に広めてほしい。

研究 テーマ	よりよい社会について考えようとする子どもの育成 ー自分と社会とのかかわりを実感し、考えを深める指導の工夫ー ～「情報ネットワークを医療に生かす」実践を通して～			
提案者	世田谷区立松沢小学校 教諭 佐藤 真至	新宿区立四谷小学校 教諭 北中 啓勝	助言者	世田谷区立松原小学校 校長 小林 巧
司会者	大田区立入新井第二小学校 校長 嶋田 英樹		記録者	小平市立小平第六小学校 教諭 櫻井 正義

【提 案】

(1) かかわりを実感し、共感的に理解できる教材の工夫…視点に基づいた教材開発

①児童が生活とのかかわりを意識できる教材を取り上げる。

導入では自分の家族など生活の中にかかわることや目にすることがある妊婦を医療ネットワークによって生活が向上した患者の例として取り上げる。

②社会の発展に熱意をもって働く人の姿が見える事例を取り上げる。

医療ネットワークを医療現場で活用する人々の姿が具体的に見える事例を取り上げ、医療ネットワークの利便性に目を向けさせる。香川県や金沢市の医師や看護師、患者の姿から、医療ネットワークを活用することで具体的に患者や医療機関にとってどのような利点があり、情報化の進展によって人々の生活がどのように向上したのかを調べることができるようにする。

③「人」を通して学ぶねらいを明確にして指導計画に位置付ける。

学習の中で取り上げる「人」は、5年部会が設定した『「人」を教材として選定する視点』に基づいて選定した。第1時・第2時では、『「人」の生活の様子から課題をつかむ』ことをねらいとし、妊婦であるKさんとTさんを取り上げている。医療ネットワークについて調べる活動では、『「人」を通して社会の仕組みや様子を教わる』ことをねらいとし、香川県の医師や患者から取材した内容やネットワークを運営管理に携わる方の話を資料化した。

(2) 社会の在り方を考える場面の設定…「ふかめる」場面の位置付け

「ふかめる」場面では、医療ネットワークが抱える問題点を提示し、これから情報ネットワークを、医療にどのように生かしていけばよいのかについて考える活動を行う。社会が抱えている課題を提示し、調べたことを根拠に社会や自分のあり方を考え、意見を交流することでこれからの情報ネットワークの進展への関心を高める。

また、社会事象を自分事で考えさせるために、自分たちの住む地域の事例について調べる活動を行った。

(3) 意欲を高め、考えを深めるための工夫…学習活動の工夫

調べたことを情報ネットワーク図に表すことで、目に見えない情報ネットワークを児童が具体的にイメージできるようにする。また、児童が調べた事象を情報ネットワーク図として図式化することで、自分たち（患者）の生活の向上は、様々な人々の相互のかかわりの上に成り立っていることを理解することにつながると考えた。

【協議内容】

Q 情報ネットワークの教材化が難しい。千葉県では東日本大震災の際の事例を扱ったが自分事にはならなかった。事例を探すにはどうすればよいか。

A 事例を探すのは難しいが、事例地の学習ではないので複数の事例を扱ってもよいのではないか。また、東日本大震災を事例で扱う際は、注意が必要である。

【講師指導】

- 情報ネットワークは事例学習ではないので複数の事例を扱うことも考えられる。
- 情報ネットワークの学習は教科書の読解になってしまうので、注意をしなければならない。
- 「人」は運営側の人に絞らなくてもよい。(学習指導要領には「工夫や努力」とは書いていない) 利用する人の声などを提示すると児童も実感できるのではないかな。

研究 テーマ	「地域教材の活用を通して、社会的事象が『みえる』『わかる』社会科学習の創造」 ～小学校第6学年「日本の歴史」（長く続いた戦争と人々の暮らし）の実践から～		
提案者	稲敷市立古渡小学校 教諭 駒澤 悦郎	助言者	石岡市教育委員会 指導主事 會田 照行
司会者	稲敷市立あずま南小学校 教諭 星 充	記録者	稲敷市立沼里小学校 教諭 松島 正典

【提 案】

問いや問題意識を熟成させていくことができる学習材を発掘し、教材化し、単元を貫いていく「学習問題」へと発展させること、「学習の対象」との「かかわり」を深めるように単元を構成し、実践を行った。

(1) 地域教材の活用について

- ① 学校の近くに建つ戦没者の慰霊碑
- ② 戦時中の生活を知る地域のゲストティーチャー
- ③ 市の博物館、資料館見学と学芸員へのインタビュー

(2) 学習カードの活用について

【協議内容】

Q どのような地域教材があり、どのように収集しているか。

A 近隣には、広畑貝塚や戦争関連の資料館があり、恵まれた環境にある。また、市の歴史資料館と連携し、学芸員との交流もある。資料収集は、個人の力によるところが多く、データベース化や組織的な取組が課題となっている。

○ 戦争を実際に体験した方をゲストティーチャーに迎えての学習は、「人との関わり」という視点で、有効な学習であるが、戦争体験者も減っており、難しくなっている。また、授業者の意図に沿った話をしていただけるとは限らない。その点で、VTRに収め、編集し保存するという方法は有効な手段である。

【指導助言】

一般に、社会科を苦手としている児童は多い。わかる喜びを実感させ、社会科が好きな児童を育てていくという視点で、本実践は、社会科のねらいに沿った優れた実践であった。

(1) 学習過程について

単に調べて発表して終わりといった実践が見受けられるが、本実践では、調べた後に、考え、表現し、深め、活用していくという学習過程を設定することにより、「見える」「分かる」から「みえる」「わかる」へ高めることができていた。

(2) 地域教材の活用について

学校の近くに建つ戦没者の慰霊碑は、導入だけでなく、単元全体を通して活用できる優れた教材であった。児童の学習意欲を持続させることができていた。特に、石碑に刻まれた戦没者の戦没場所と日本軍の勢力範囲が一致したことの発見は、身近な学習材を通して一般化が図られ、「みえる」「わかる」に高まった瞬間であった。

また、地域教材は、インターネットが活用しにくい。聞き取り調査や現地調査が主になる。そのことがかえって、体験的な活動が中心となり有効であった。

(3) 学習カードの活用について

本実践で活用した学習カードは、学習の流れが分かり、自分の思いを整理したり、学習を振り返ったりするのに効果的であった。コミュニケーションの補助にも役立っている。

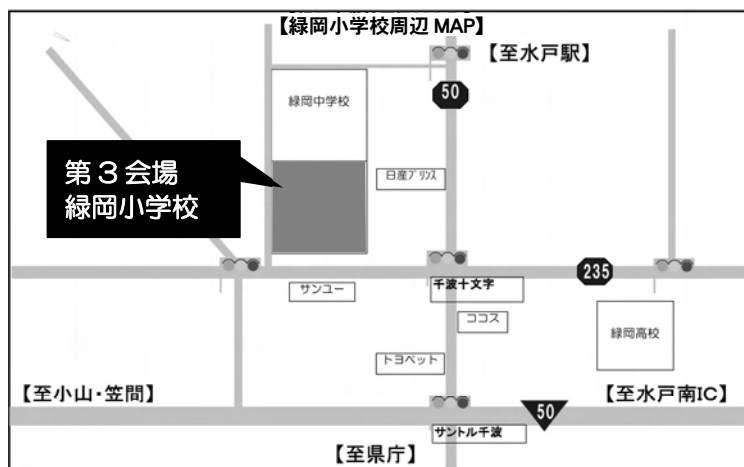
(4) 課題について

地域素材を個人で教材化していくことは限界がある。組織的な体制をつくり、データベース化して、次に生かしていった欲しい。関係機関との連携も強化していく必要がある。

課題となった表現力については、積み重ねも大切である。機会を増やし、自分の言葉で話せる児童を育てていった欲しい。

【分科会】

第3会場 水戸市立緑岡小学校



〒 310-0913

茨城県水戸市見川町 2 5 6 3

TEL 029-241-1923

FAX 029-241-1955

E-mail midorioka-e@magokoro.ed.jp

<http://www.magokoro.ed.jp/midorioka-e/>

校長 富永 泰久

(日 程)

11:45 13:20 14:05 14:20 15:05 15:15 16:25

移動・昼食	公開授業	休 憩	学年別 授業研究会	休 憩	学年別 課題研究会
-------	------	-----	--------------	-----	--------------

(公開授業・学年別授業研究会)

学 級	授 業 者	単 元 名	司会者	記録者
3 年 3 組	田崎 友紀	わたしたちの暮らしと納豆工場	結城市立上山川小学校 教諭 竹澤 正雄	筑西市立大田小学校 教諭 渡辺 孝弥
4 年 2 組	川村 潤子	「笠間焼」を受けつぎ・生かすまち (笠間市)	笠間市立穴戸小学校 教諭 中山 光一	筑西市立関城東小学校 教諭 飯島 章夫
5 年 3 組	近藤 理恵子	情報化した社会とわたしたちの生活	龍ヶ崎市立城西中学校 教諭 後藤 亮二	筑西市立村田小学校 教諭 島田 和宏
6 年 2 組	川崎 武信	わたしたちの暮らしと日本国憲法	小美玉市立堅倉小学校 教諭 金子 和広	筑西市立五所小学校 教頭 深見 喜弘

(学年別課題研究会)

学年	提案者	司会者	助言者	記録者
3 年	茨城 筑西市立伊讃小学校 教諭 向田 伸一	結城市立江川南小学校 教諭 宮川 勉	県西教育事務所 指導主事 森田 泰司	古河市立諸川小学校 教諭 木村 成雄
4 年	群馬 碓氷村立鎌原小学校 教諭 加部 善基	東吾妻町立東小学校 教頭 山田 一彦	長野原町立北軽井沢小学校 校長 高橋 通泰	長野原町立応桑小学校 教諭 豊田 武司
5 年	茨城 龍ヶ崎市立八原小学校 教諭 遠藤 弘太郎	稲敷市立江戸崎中学校 教頭 小岩 泰規	水戸市総合教育研究所 指導主事 折本 正巳	土浦市立山ノ荘小学校 教諭 渡邊 美智子
6 年	千葉 八千代市立大和田西小学校 教諭 工藤 和子	八千代市立大和田南小学校 教諭 奈良 敬信	印西市小倉台小学校 校長 川嶋 知道	八千代市立大和田西小学校 教諭 村瀬 正

豊かなかかわりによって、自分の考えをみがく社会科学習の創造

第16回関東地区小学校社会科研究協議会の授業公開校として、本校では、「学習の対象とのかかわり」「学習者同士のかかわり」を十分に生かし、自分事として社会的事象を考えていく「自分とのかかわり」を大切にしてきました。「みえる・わかる」とは何か、試行錯誤を繰り返してきましたが、学習指導要領完全実施のこの年に、共に考え合い、子どもたちが輝く授業を公開することができたことをうれしく思っております。

1 公開授業の様子

【第3学年】水戸名産の「納豆」をつくる納豆工場の仕事を取り上げ、工場の人々の工夫を探っていきました。自分たちが作った納豆と「天狗納豆」の納豆を食べ比べる体験から生まれた、「なぜ、こんなに違うのだろう」という問いから、意欲的に考え、話し合う元気な子どもたちの姿が見られました。

【第4学年】茨城県の特徴ある地域の人々の生活として伝統的な笠間焼を受け継ぎ生かすまち、笠間市を取り上げました。「なぜ、笠間焼は復活したのか」という問いから、笠間焼に携わる様々な立場の人々のかかわりを解き明かしました。

【第5学年】様々なメディアの発信する情報をどのように活用していけばいいのか、新聞記事を活用しながら考えました。「情報活用ナビ」をバージョンアップすることを通して、情報とのかかわりを送り手と受け手の両面から考えることができました。

【第6学年】子どもたちにとって馴染みの薄い政治や憲法を、水戸市議会報や新聞記事を活用して考えていきました。我が国の政治は、日本国憲法の考えに基づいて行われていることを子どもたちが自分の言葉で堂々と表現していました。



2 学年別授業研究会の様子

3学年分科会では、学年の発達段階を考慮し、納豆を食べ比べる体験活動を入れたことで、工場の仕事を自分事で考えていたことを評価していただきました。4学年分科会では、「写真では見えなかったことが、話し合いを通してたくさん分かった。」という言葉から分かるように、関係図をつくっていったことで、見えなかったものが「みえる・わかる」学習になったと感想をいただきました。5学年分科会では、学習の流れがわかる板書についてアドバイスをいただきました。6学年分科会では、自分の考えを堂々と発表する子どもを育てる学級経営の素晴らしさを評価していただきました。

最後になりましたが、これまでご指導賜りました國學院大學教授 安野 功様、水戸市総合教育研究所 指導主事 折本 正巳様、茨城大学教育学部附属小学校 教諭 中島隆行様をはじめ多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

文責（ 田中 久之 ）

単元名	「わたしたちのくらしと納豆工場」 授業者 水戸市立緑岡小学校 教諭 田崎 友紀		
司会者	結城市立上山川小学校 教諭 竹澤 正雄	記録者	筑西市立大田小学校 教諭 渡辺 孝弥

【提 案】

授業をするにあたって、地域の特色を出したいという思いから、納豆に注目した。納豆は水戸の名産として全国に知れ渡っている。その中でも、市内の笹沼五郎商店は、天狗納豆として児童たちも知っている店である。その笹沼五郎商店も、昨年の震災で被害を受けた。建物被害はもちろん、風評被害でもある。その大変さや乗り越える努力や工夫を児童に伝えたい思いもあり、年間指導計画を変え、この単元を設定した。

授業作りの課題として、「実際に納豆を消費者に売る視点から、手作り工場生産を比較しながら話し合いをすれば、常に安定した味と量を製造する工場の特色に着目し、実感を伴った学習課題を設定することができるであろう。」と考えた。授業では、「かかわり」を重視した指導を行った。学習の対象とのかかわりとして、より具体的な課題をもたせること、学習者同士のかかわりとして、話し合いの場を多くもつこと、自分とのかかわりとして、「かかわりメモ」を書き、振り返ったり積み重ねたりすることで目標に近付けると考えたからである。また、実際に納豆を作り、工場生産された商品と比較することで、写真や実物を見るだけの「見える・分かる」授業から、実際の比較を通して、自分たちが作った納豆とは異なることが分かり、実際に見て調べたいという意欲につながる「みえる・わかる」授業へと変えられると考えたのである。

【協議内容】

Q 学習プリントとして「かかわりメモ」を使っていて、ノートは使っていなかったが、学習の足跡はどうなっているのか。

A 学年始めの4月からかかわりメモを使用している。単元ごとにまとめてあり、教室の後ろに「かかわりコーナー」を設け掲示し、児童同士で見ることができるようになっている。

Q 「かかわりメモ」の書かせ方の注意点とはどんなことか。

A 「分かったこと」、「疑問に思ったこと」、「調べたいこと」を注意点として書かせてきた。

Q 学習課題を変えたのは、なぜか。

A 自分が作った納豆という思いを大切にしたいだったので、「笹沼さんの工場で作った納豆と自分たちが作った納豆をくらべよう。」という課題から、「自分たちの納豆と笹沼さんの工場の納豆をくらべよう。」という課題に変えた。

Q 話し合い活動を3つから2つにしたのは、なぜか。

A 「同じように作ったはずなのに、なぜ笹沼さんの納豆と違うのだろう。」が中心発問なので、その発問に対して時間を多く取りたかった。省いた発問は、「かかわりメモ」を書くときに出ると思った。

○ 私の学校では、和菓子の工場を見学しているが、和菓子作りを体験することはできない。納豆は、児童が体験できる教材であることが分かった。また、実感を伴った問題作りを行うためには、材料選びが大切なことが分かった。

○ 自分の学校では、乳牛の見学だけなので、体験を伴った方がよいと感じた。見学や体験をすることによって、興味をもつことができ、実感を伴うことにつながる。

○ 視覚、嗅覚、味覚、触覚、聴覚の五感を使って、自分たちが作った納豆と市販の納豆を比べて、自分の言葉で「かかわりメモ」を書けたことはよかった。

○ 話し合いの中で出てきた児童の言葉に「なんか」という言葉があった。この言い表せない言葉に対し、引き出してあげられる「切り返し」ができるとよい。

○ 自分の意見をハンドサインで表したり、発表を相互指名でつなげていくことは、大変よかった。

○ 自分たちが作った納豆を食べたときはおいしいと感じ自信をもっていた児童達が、市販の納豆と比べるとまずいという結果になり、どうしてという思いが出てきた。また、自分の気づきを伝えたいと思う一方で、友達の意見を聞いて納得する声が出て深められた。

単元名	『笠間焼』を受けつぎ・生かすまち（笠間市）		
	授業者	水戸市立緑岡小学校	教諭 川村 潤子
司会者	笠間市立宍戸小学校 教諭 中山 光一	記録者	筑西市立関城東小学校 教諭 飯島 章夫

【提 案】

本校では、「学習対象とのかかわり」「学習者同士のかかわり」「自分とのかかわり」を重視し、社会的事象に対する自分の見方・考え方の質を高め（「見える・分かる」から「みえる・わかる」へ）、他と共によりよい社会をつくっていく子どもを育む社会科学学習を目指して、『豊かなかかわりによって自分の考えをみがく社会科学学習の創造』という主題を設定した。学習の対象に対する自分の興味・関心を高め、主体的に調べ、自分の考えをみがいていく学習を子どもたちとともにつくっていきたいと考えた。

(1) 学習対象とのかかわり

- ① 笠間焼きに対する興味・関心を高め、身近に感じさせるために、他教科で行った笠間焼作り体験を想起させた。
- ② 子どもたちが本気で調べたいと思える問題場面を設定するために、笠間焼の危機と復活が分かる資料を提示した。
- ③ 学習問題に対して意欲的に追究したり、笠間焼にかかわっている人々の工夫や努力、思いや願いにふれさせたりするために、笠間市へ見学に行き伝統工芸士や協同組合、市役所、窯業指導所の方の話を聞くようにした。

(2) 学習者同士のかかわり

「笠間焼が復活したのは、なぜだろう。」という学習問題に対して多面的な見方や考え方ができるようにしたいと考えた。そのために、個人追究後にコース別に報告会を行ったり、個人追究から考えた根拠をもとに全体で話し合ったりする場を設定した。その際、「構造的な板書」を通して、考えの違いやつながりがみえるように支援した。

(3) 自分とのかかわり

一人一人の思考を深めるために、友達や教師との対話の場や「かかわりメモ（振り返り）」を書く場を設けた。また、学習前と学習後で笠間焼に対する思いや考えの深まりを振り返ることができるようにするために、単元の終末に笠間焼のよさや将来の笠間焼と自分とのかかわりについて自分の言葉で表現する活動を設定した。

【協議内容】

- 学習課題について
 - ・「復活」という言葉ではなくてもよいのではないか。
 - ・笠間焼を作っている人の熱い思いを伝えるにはどうしたらよいか。
 - ・消費者を引き出して、笠間焼きに対する愛着や愛情にふれさせられればよかった。
- 「協力」という言葉の重さ
 - ・授業の最初に児童から「協力」という言葉が出てきてしまって、ドキッとしてしまった。
 - ・授業の最初に出た「協力」と授業最後に児童が言う「協力」は、全然レベルが違うのでよい。
 - ・深めるためには、「人々の思い」まで迫っていく必要があった。
 - ・最後のアンテナショップの写真を試してみようか。
- 授業のまとめについて
 - ・簡単に「それぞれが協力して、笠間焼を復活させた。」とするのではなく、「君たちだったらどのように受け継ぐか？」と問いかけてみようか。例えば、収入はどうかなど。
 - ・継承する人をつくるのではなく、愛着心を高めるために。
- 「思い」「願い」に迫るために「つながりさがし」から
 - ・根拠をもって調べるため→「笠間市手帳（調査メモ）」
 - ・調査メモが、現場の人の説明になってしまった→復活に関係ないものを省く。
 - ・「どんな思いだったのか？」聞いてきたものもあった。
 - ・授業では、ゆさぶりをかけ、必要なことを「色カード」に書かせたり、「付箋」を貼らせたりした。
- 違った視点で
 - ・窯元が8軒から増えて復活したのは、町づくりもかかわっていないのか。栃木県の益子では、例えば、「電柱がない」など、町をあげて協力している。
 - ・授業は、「笠間焼にかかわる人々の生活」が視点だったのでよい。

【感想・意見】

- 次々と発表する児童がいて、日頃の学級経営がすばらしいと感じた。
- 笠間市の先生から、「水戸市の4年生が笠間市のことをこんなに詳しく勉強している。」ということ自分の学級の児童に伝えたいという感想があった。
- 「写真では分からないことが、たくさん分かったね。」という先生の言葉が印象に残った。

単元名	「情報化した社会とわたしたちの生活」 授業者 水戸市立緑岡小学校 教諭 近藤 理恵子		
司会者	龍ヶ崎市立城西中学校 教諭 後藤 亮二	記録者	筑西市立村田小学校 教諭 島田 和宏

【提 案】

新聞やテレビは、事実に基づいて取材して発信されているものであり、正しい情報が発信されていると児童たちは理解している。しかし、新聞やテレビであっても間違いがある。それを最初から教えてしまっても、ひらがなの「みえる」「わかる」には至らないであろう。ひらがなの「みえる」「わかる」子にするために、「わかった」と思っていた児童の気持ちを揺さぶることによって、得た情報を鵜呑みにするのではなく「自分で判断することができる」のが、ひらがなの「みえる」「わかる」ではないか。そこに至るようにと考えて本単元に取り組んできた。

本時は、新聞社やメディアなどに、「本当のことを伝えてほしい」「自分たちも気を付けていく」の2点を目標に設定していたが、どちらか1つを書いている児童たちが多かった。しかし、話し合いの中では、「メディアの責任」と「情報を受ける側の判断も必要」という2点を考えることができた。

【協議内容】

Q 「情報活用ナビ」には、新聞だけでなく様々なメディアのことが出ている。児童たちの視点がいろいろなところに行き、焦点が絞れなかったのではないかな。新聞だけでもよかったのではないかな。

A 導入では、どんな方法で情報を手に入れているかのアンケートをとり、私たちは様々なメディアを使っていることを学習してきた。情報の発信過程は新聞で学習したが、他のメディアの特徴も学習してきている。児童たちの意識の中で混乱はなかった。

Q 活動の中の3の(3)で、自分が書きたいと考えたことをカードに書いて発表し合う場面があったが、ここでは板書されたことではなく自分の意見を書かせた方がよかったのではないかな。さらに、根拠も示されればよかったのではないかな。

A 理由を書く時間があればよいと思うが、本時ではここで理由を書く時間を取ると時間的に余裕がないと考えた。毎時間授業の終末で、「かかわりメモ」を書く活動があるので、この場面では簡単に発表できるようにした。

Q 「かかわりメモ」について、どのような実践をしてくれているのか。

A 本校では、振り返りを書くという積み重ねをしてくれている。授業で出会った学習の対象と自分とのかかわり、感じたこと、あるいは友達の意見を聞いて感じたことを児童が自分自身に向けて書くという方法をとっている。形式は決まっていなくても、「学習の見取り」にも効果があるためどの単元でも行っている。

Q 話し合い活動のなかで、教師が児童の意見のポイントを押さえて板書していたので、児童は論点を整理しやすかった。普段の授業では、どのように話し合い活動を進めているのか。

A 板書のタイミングが難しく、発言をその都度板書していると話し合いが止まってしまうので、可能な限り板書をしないで、児童の意見を聞いて最後に書くように心がけている。

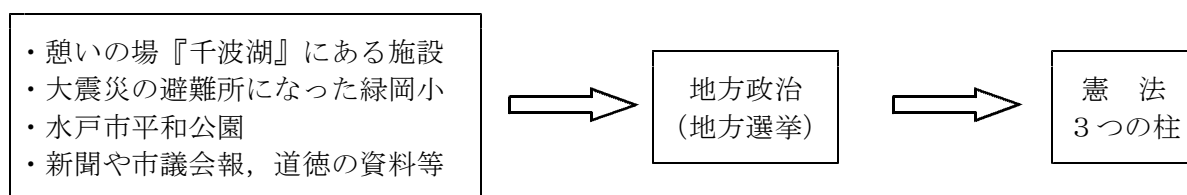
Q 話し合い活動では、教師と児童の一問一答になりがちである。話し合いの質を高めていくための取組について紹介してほしい。

A 事実と考えを色分けして板書し、それを教師が線でつないでいく。その際、児童たちの相互指名で発表させるようにしている。話し合いが停滞したら、グループでの話し合い等を適宜取り入れている。

単元名	「わたしたちのくらしと日本国憲法」 授業者 水戸市立緑岡小学校 教諭 川崎 武信		
司会者	小美玉市立堅倉小学校 教諭 金子 和広	記録者	筑西市立五所小学校 教頭 深見 喜弘

【提 案】

従来、憲法学習においては、知識の教え込みが主流になっていたことを考慮して、本研究では、できるだけ身近に捉えさせるという視点から教材を編成した。具体的には、地元（水戸市）の事象を再構築して教材化し、最後に憲法に結びつけようとした。つまり、身近なところから広げていく学習へと組み立てていった。図示すると、以下のような流れである。



【協議内容】

Q 1分間スピーチの内容をどのようにレベルアップさせたのか。

A 初めは児童の興味・関心のあることを新聞などから拾い出して発表させた。その中から学習に関係している欄に目を向けさせると同時に、他にも市議会報や市の広報誌などにも憲法に結びつく内容があることに気付かせて、児童の思いを憲法に収斂させていくように意識しながら指導を行ってきた。また、掲示物などの環境も整備した。

Q 児童は日本国憲法の条文について、かなり理解しているように見受けられた。条文に触れさせるような何か工夫があったのか。

A 教科書や資料集にあるものを使って読ませたり、教室に掲示したりしていつも目に入るようにした。

Q 関わりメモを書く意欲を高めるのにどんな手立てをしたのか。

A 驚いたこと、初めて知ったこと、疑問に思ったこと、もっと調べたいと思ったことを書くことから始まり、①教材の関わりを通して感じたこと（自己内対話）、②他の児童との関わりを通してわかったこと、③授業を通して自分の考えが変容したことの3つを段階的に分けて、それぞれに違う色のシールを児童の自己判断で貼らせた。また、社会科だけでなく他の教科でも書く練習を実践してきた。よい意見があればコーナーに掲示して励ますよう工夫した。

Q 表現を評価する規準は何か。

A 児童のかかわりメモから、情意的な感想より高次の考えへの変容が見られれば、それを認め評価した。

Q 押さえておかなければならない用語を習得させるには、どうしたらよいか。

A 他の教科でもそうであるように、反復させて記憶させたり競争原理を効果的に使ったりした。

Q 書く活動・話し合い活動において特に実践していることは何か。

A 朝の時間にひとつのテーマについて「話し合いタイム」を設けている。初めの時期は、他者の意見に同調するものが多かったので、発表の際には、「私は～」とか「私だったら～」という主語を明確にさせて発表の練習をしてきた。その結果、自分の意見をもち、発表できるようになった。

学年別課題研究会 第3学年 第3会場 水戸市立緑岡小学校

研究 テーマ	「考えたことを伝え合うことによりお互いの考えを深めていく社会科学習の在り方 ～第3学年「市の様子」の実践を通して～」		
提案者	筑西市立伊讃小学校 教諭 向田 伸一	助言者	県西教育事務所 指導主事 森田 泰司
司会者	結城市立江川南小学校 教諭 宮川 勉	記録者	古河市立諸川小学校 教諭 木村 成雄

【提 案】

- ・学習者同士のかかわりを重視していくことで、「市の様子」に関する様々な事象のつながりが「みえる」「わかる」児童の姿に迫る。
- (1) 学習内容の明確化（「みえる」「わかる」子どもの姿の構造図をもとに）
- (2) お互いの考えを深めていく学習の工夫
 - ① ICT機器（ガーグルース）を活用し、バーチャル町探検から分かったことを白地図へ表す。
 - ② 2つの地図を重ね合わせ、2つの視点のかかわりに着目した「みえる」「わかる」話し合い。
 - ③ 市内にある学校の航空写真から、その学校は地図上のどこにあるのかを考え、根拠を述べながらの深め合い。

【協議内容】

- Q 副読本以外に用意した資料は何か。また、振り返りの文章を書くことが苦手な児童にどのように支援したのか。
- A 活動に必要な地図は、現地を車で取材し、全て自作した。書くことが苦手な児童に対しては、教師が用意したフォーマット（書き方の枠組を示したもの）を使い支援した。
- Q メタ認知とは何か。
- A 自分の思考や行動そのものを対象として客観的に把握し認識することであり、本大会の主題にかかわる「自分とのかかわり」に通じるものである。
- Q 「みえる」「わかる」ために、日常的に日記や言語指導をしている姿に感心した。3年生でこれだけできるようになっているのだが、6年生までにどのような姿を望んでいるのか。
- A たとえば、資料として提示した1枚の写真で1時間話し合いができるようになれば理想である。
- Q 町探検に行けない児童にバーチャル体験させ、視覚的に捉えさせることはよい。身近な地域をより身近に感じさせている。話し合いで、根拠をもとにした指導の在り方を詳しく聞きたい。
- A 3年生なので写真や挿絵を中心に、とにかく詳しく読み取らせている。自分の論を展開させることを大切にしている。
- Q 緑岡小では、お互いの考えを深め合う力を育てるために、朝の会で話し合いタイムを設け実践してきたが、学校全体で実践していることはないか。
- A 学校全体で取り組んでいることはないが、話し合いマニュアルを使った言語指導は必要である。

【指導助言】

- (1) 学習内容の明確化について
- ・問題解決的な学習が重視されてきたが、以下の3点について明確ではない学習指導案が多い。
 - ① どの教材で何を調べさせるか ② 調べる方法は何か ③ 考えさせたいことは何か
 - ・社会科としての指導すべき内容を曖昧にしてはいけない。（内容知・方法知ともに）
 - ・今回の学習指導要領の改訂において、学習内容の明確化はとても大切である。
- (2) お互いの考えを深めていく工夫について
- ・最近、作業的な活動を軽視する傾向にある。白地図に書き込ませる活動が減少しているが、3年の市や4年の県における指導は、白地図を積極的に活用することが大切である。そのような工夫により、身近な地域を実感的に理解させたい。
 - ・言語の充実に関して、社会科においても重要語句をしっかりと押さえたい。それが、表現力につながっていく。
 - ・振り返り（まとめ）においてフォーマットを与え、書く視点を押さえることが大切である。
 - ・話し合い活動で大切なのは、学級活動の話し合いをしっかりとやること。それらを通して、遠慮せずに自分の考えを自然に話せるようになり、相手の話を受け止める姿勢をバランスよく育てることができる。その際、社会科で押さえた知識をしっかりと使わせたい。
 - ・体験の言語化、言葉を使わざるをえない状況をつくることが大切である。

学年別課題研究会 第4学年 第3会場 水戸市立緑岡小学校

研究 テーマ	「社会的な見方や考え方を高める地域教材の開発の工夫」 ―鎌原村を復興させた先人の学習を通して―		
提案者	孺恋村立鎌原小学校 教諭 加部 善基	助言者	長野原町立北軽井沢小学校 校長 高橋 通泰
司会者	東吾妻町立東小学校 教頭 山田 一彦	記録者	長野原町立応桑小学校 教諭 豊田 武司

【提 案】

本発表は、新学習指導要領第3学年及び第4学年の内容（5）のウについて教材開発を行った実践である。浅間焼け（天明3年の浅間山の噴火）による災害にくじけず、鎌原村を復興させてきたことについて「先人の生き方や願い」を中心に学習し、「自分たちの郷土をよりよいものにしていくとする」社会的な見方や考え方を育成しようと考えた。

（授業の実際）

- ① 児童や家庭へのアンケートを実施し、それを児童に発表させながら単元を貫く学習問題を設定した。さらに、児童を学習問題追究の柱ごとに4グループに分けて、お互いの考えを出し合って深め合うことができるように学習過程を設定した。
- ② 児童が調べやすいように、資料を収集し、学習センターを会議室の一角に作った。
- ③ ゲストティーチャーを招いて話を聞いたり、地域にある資料館や鎌原観音堂などの施設に実際に取材に行ったりして調査を行った。聞いた内容を動画ファイルとして児童用パソコンに保存し、いつでも閲覧できるようにした。
- ④ 個々の児童の学習状況や適切な支援を行うために「授業を振り返るシート」を活用した。
- ⑤ 中間発表会を行い、グループ毎に情報交換を行う中で、自分たちの発表をさらに高められるよう配慮した。
- ⑥ 最終発表会では、追究の柱を念頭において発表を行うことにより、学習問題の答えを確認し合ったり、調査した成果や自分たちが分かったこと・考えたことを共有させたりして学習を深めた。

（成果）

- ・ 4つの学習問題追究の柱を設定して調べ学習を進めてきたことで、地域の発展に尽くした先人の願いや工夫・努力、苦心などについての理解が深まり、先人の働きや苦心によって地域の人々の生活が向上してきたという社会的見方や考え方を高めることができた。
- ・ あらかじめ学習の流れを明確に示し、小グループで計画的に調査を行ったことにより、児童はお互いの意見を比較し、関連づけながら、意欲的に課題解決に取り組むことができた。

【協議内容】

- Q 歴史の資料は、なかなか見つからない。さらに資料が見つかったとしても難しく、4年生という児童の発達段階を考えたときにどのように提示するのがよいのか。
- A 内容の難しさもあるが子どもたちの実態に合わせ提示する。説明を加えながらも史実をきちんと伝えているものを見せる。
- Q 3・4年生で、地域教材を扱うが、歴史の概念が中学年には難しい。
- A 地域に愛着を持つとか、地域に尽くしたその人達の思いとか願いに重点を置いて指導することでよいのではないかと。
- 実践発表を受けて、来年度も引き続き地域教材の研究を続けていく気持ちを新たにしたい。

【指導助言】

- ① 「社会的な見方や考え方を高めるための教材の開発」について
浅間焼けを教材化するにあたり、現存する数少ない資料と地域施設を有効に活用し、小学校4年生が自主的に調査できるよう編成していた。また、ゲストティーチャーなどの説明を何回でも繰り返し見聞きできるように児童用パソコンの中に保存したことや、学習センターを開設し、児童が自分にあった資料を手に入れられる学習環境を設定したことで、児童自身が教材に実際にあたって調査できるようになり、単なる写し学習にならず、児童一人一人に社会的な見方や考え方が高まっていった。
- ② 「開発された教材を生かした指導の工夫」について
今回の実践では、「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」という学習過程を設定した。「つかむ」過程では、児童の学習への思いを授業者が構造化していき、4つの追究の柱に集約していった。児童の実態に応じて、授業者がきちんと方向を指し示すことにより、人々の「願い」「思い」をキーワードとして、単元を通して追究するに耐えうる学習問題ができた。また、「まとめる」過程では、考えたことを自分の言葉でまとめて伝え合うことにより、お互いの考えを深めていく実践ができた。

研究 テーマ	「社会的事象の意味について考える社会科学学習の指導の在り方」 ～小学校第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」におけるシンキング・ツール 型ワークシートの開発と活用を通して～		
提案者	龍ヶ崎市立八原小学校 教諭 遠藤 弘太郎	助言者	水戸市総合教育研究所 指導主事 折本 正巳
司会者	稲敷市立江戸崎中学校 教頭 小岩 泰規	記録者	土浦市立山ノ荘小学校 教諭 渡邊 美智子

【提 案】

1 研究の内容

(1) 基本的な考え

- ① 社会的事象について考える児童
- ② 社会的事象の意味について考える児童の姿

(2) 社会的事象の意味について考えるワークシート①～③ (実践)

(3) 研究のまとめ

(4) 今後の課題

【協議内容】

Q 単元構成を考えた上でコマーシャルを取り上げた理由は何か。

A コマーシャルはテレビ放送の一部であり、子どもたちにとって身近な存在で、内容を素直に受け取ってしまう（実態調査より）。コマーシャルには、プラス面とマイナス面があることを知り、正しい判断力を身に付けることが必要になる。この学習活動が、今回のテーマの「みえる」「わかる」につながると考えた。児童の実態（環境や興味）を考慮して、学習対象をコマーシャルにして、「かかわり」を大切にしたい。

Q 学級として、単元を貫く学習課題をどのように設定したのか。

A ただのコマーシャルではなく、「見ると欲しくなるコマーシャル作りの舞台裏には、買わせるためのどのような工夫があるか」として、子どもたちの発想を生かしながら、舞台裏を調べることにした。

Q シンキング・ツール型のワークシートとは何か。

A 関西大学の「シンキング・ツール」思考力育成プログラム委員会開発の「シンキング・ツール」を参考している。頭の中にあるばらばらな知識を明確にして、それらをつなぎ合わせることで、思考を整理できる働きがあるワークシートである。学習者同士の思考が「見える」「分かる」が「みえる」「わかる」に変化する様子が分かる。

○ 思考の足跡が分かるワークシートの構成である。学習者同士の「かかわり」がよく分かった。

Q 「自分とのかかわり」が見られたのは、どんな活動か。

A 話し合い後に一人一人が個人でまとめる時間をとった時の活動である。コマーシャルを100%信じるのではなく、いろいろな角度から情報を得ることが大切とまとめられた。また、調べ学習を進めていく過程でも、子どもの考えが疑問文から断定文になり、思考の深まりが見られた。

【指導助言】

1 社会科は「考える教科」である。グラフや表を活用して、社会の事象を読み取っていく学習であり、今日の課題に合致している。

「考える学習」を目指すには、「自分自身との対話」（読むこと・書くこと）「他者との対話」（話し合う）が大切で、書くことで自分の考えを整理して、話し合いに臨むことが重要になる。

2 ワークシートの活用について

遠藤先生の提案のような、広げる・つなげる・自分との関係を見つめることができるワークシートが望ましい。冷静に自分を見つめることによって、自信がつくとともに、自尊感情が高められる。

3 「考える学習」を作るために

授業作りと人間関係作りの両方が大切である。

○授業作りのポイント

- ・いろいろな意見が出てくる課題→全体での練り上げ→個人に返す等、学習過程が進むにつれ、その段階ごとに思考力が深められる。
- ・考えをノートに書く時間を取る。教師は机間支援をして、子どもの思考を知ることが大切であり、それを話し合いに生かすようにする。
- ・話し合いをする。（実態に応じて、グループにするか全体にするか決める。）
- ・振り返る。

○人間関係作りのポイント

- ・自分の考えを自由に表現できるように支援する。子どもの実感が伴った意見であることが大切である。
- ・「高い高い穴に落ちることができる（穴の中に落ちた、相手の立場になって考えられる）教師になろう。」

研 究 テーマ	「自ら考え、社会にかかわろうとする子どもの育成をめざして」 ～くらしと政治の学習を通して～		
提案者	八千代市立大和田西小学校 教諭 工藤 和子	助言者	印西市立小倉台小学校 校長 川嶋 知道
司会者	八千代市立大和田南小学校 教諭 奈良 敬信	記録者	八千代市立大和田西小学校 教諭 村瀬 正

【提 案】

・研究仮説と授業・学習過程とのかかわり

(1) 仮説 1：学習問題の明確化

子どもにとって身近な存在である駅のエレベーターの設置費用から、「なぜ国が費用負担をしているのか。」と調べる必然性をもたせることができた。

(2) 仮説 2：話し合い・伝え合い⇒子どもの思考力を向上させる。

単元を通して、身近な問題から市議会や税金の理解を深め、伝え合うことで、国の政治の仕組みや憲法についてといった新たな課題を見出すことができた。

(3) 疑問を解決し、新たな疑問を生み出す学習過程

【学習問題】⇒【自力解決】

- ・市役所見学による市議会理解
- ・租税教室による税金理解

⇒【比較・整序】⇒【発展】

- ・仮説 2 参照
- ・裁判の仕組み
- ・模擬裁判

【協議内容】

Q 駅のエレベーターの使用頻度からすると、本当に住民の願いなのか。

A 市長への手紙が市の Web サイトで閲覧でき、その中にエレベーター設置のお願いがいくつもあった。この内容を子どもに投げかけた。

Q 社会科と他教科との関連は何か。

A 総合的な学習の時間でキャリア教育を取り組み、子どもの将来設計・仕事を見据えて調べるようにしている。

A 今回の提案にある法教育は、社会科だけでなく、特別活動や道徳、総合とをリンクさせて取り組むことが大切であろう。

Q 研究主題とのかかわりについて。特に授業の形態や学習過程についての協議を。

A 少し前までは、ギャラリー形式やパビリオン形式のような発表会が多かった。しかし、それで学力がついているのか疑問である。今回の授業公開であったように、子どもが振り返りカード等で自己反省・振り返りをするのが大切である。

A 本大会で配布した単元の構造図を用いて、事項と事項をつなげることで「かかわり」を見出し、「みえる」「わかる」を子どもにつかませることを今後も行いたい。

A 単に発表会では「つながり」「かかわり」を見つけ出す力は身に付かない。子どもが友達からどんなことを聞くのか理解させたり、教師が切り返しの発問や資料提示を加えたりすることで子どもが本気になって学ぼうとすることが今回の授業公開で感じた。

【指導助言】

大和田西小は開校以来 30 年以上社会科の研究を続け、自主公開を行っている学校である。そのため本提案から学ぶべきことは多いであろう。また、本提案と授業公開の両者の実践は、子どもたちから離れがちな政治の単元を、子どもにとって身近な素材を教材化しており、大変評価できる。

特に、エレベーター設置費用からの学習問題をもとに、税金がどのように使われているのか租税教室によって調べたり、住民の意見がどのように反映されるのか市議会について調べたりと教材と子どもとのかかわりが最後まで通せるような学習過程を組んでいるところがよい。

新学習指導要領では、言語活動の充実が叫ばれているが、この言語活動には不易と流行がある。流行の部分では、これから電子教科書や電子黒板等の ICT 機器が導入されるので、そうした機器を取り入れた実践を行ってほしい。しかし、不易として社会科では事象と向き合い、疑問を解決しながら考えることが重要である。教材の捉え方の違いが子どもに影響するので、これからは社会科のもつ意味を考えて、教材研究を行い、実践を重ねてほしい。

全体会運営の記録

【 会 場 】 レイクビュー水戸



【 開会の言葉 】



【 飯島会長の挨拶 】



【北澤実行委員長の挨拶】



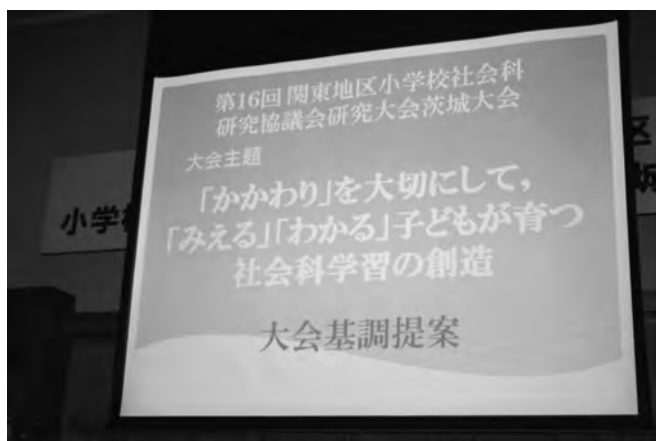
【 来賓祝辞 】 鯨岡 武 様



【 来賓・講師紹介 】



【 大会役員感謝状贈呈 】



【 大 会 基 調 提 案 】



【 指導講評 】 田辺 光博 先生



【 次期開催（東京都）地挨拶 】



【 閉会の言葉 】



【 全体会の司会 】

【 記念講演 】

(演 題)

「関小社茨城大会の意義とこれからの社会科教育」

國學院大學 教授 安野 功 先生



【 全体会会場の様子 】



分科会運営の記録

【 第 1 会場 】 水戸市立浜田小学校



分科会運営の記録

【 第 2 会 場 】 水戸市立常磐小学校



分科会運営の記録

【 第 3 会 場 】 水戸市立緑岡小学校



実行委員会

県社会科部長 1 県社会科教育研究部部長 飯島 尚之（堀原小）

委員長 1 県社会科教育研究部副部長 北澤 正（関城西小）

副委員長 1 県社会科教育研究部副部長 原田 隆（田彦中）

各部長 5 総務部 川村美弥子（牛久南中）
研究部 原田 隆（田彦中）
編集部 梅井 隆男（真壁小）
会場部 横田 英一（平井小）
庶務部 桑原 裕（幸久小）

郡市部長 37

運営委員会 委員長 原田 隆（田彦中）
副委員長 鈴木 亮太（上吉影小）

各部長 前掲

会場校代表委員 浜田小学校 深作 一徳
常磐小学校 小林 幹夫
緑岡小学校 田中 久之

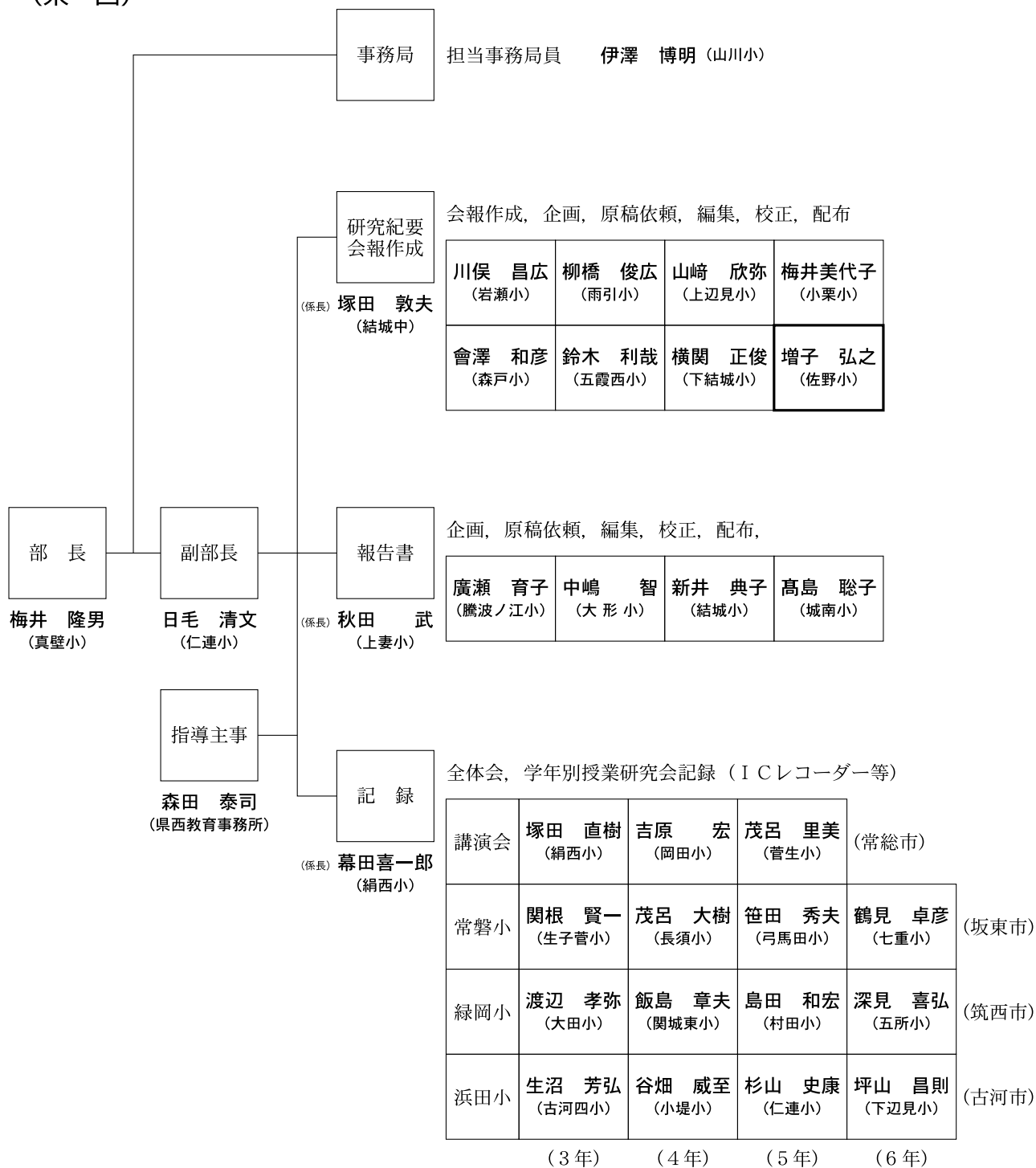
水戸市社会科教育研究部委員 市社研幹事 郡司 浩行（飯富小）
" 篠崎 健一（双葉台小）
" 豊田 和紀（大場小）

事務局（各部幹事） 事務局長 鈴木 亮太（上吉影小）
総務部（県南） 森 浩美（木原小）
研究部（中央） 中根 泰司（長岡第二小）
編集部（県西） 伊澤 博明（山川小）
会場部（県東） 二重作洋夫（豊郷小）
庶務部（県北） 小室 弘毅（大久保小）

研究推進委員 研究推進委員長 中島 隆行（附属小）
県北 小澤三智子（西小沢小）
県南 遠藤弘太郎（八原小）
中央 亀谷 裕信（寿小）
県東 山本 哲也（津澄小）
県西 向田 伸一（伊讃小）

編集 部

(県 西)



総務部

(県南)

事務局 担当事務局員 森 浩美 (木原小)

運営要項, 来賓名簿作成, 礼状送付参加者把握, 参加者名簿作成, 予算執行事務

進 行

(係長) 大久保康雄
(園部小)

	全体会	浜田小学校	常磐小学校	緑岡小学校
	三輪 章夫 (瓦会小)	立石 義孝 (高浜小)	高橋 勝美 (吉生小)	小林 洋子 (府中小)
	羽鳥 親夫 (林小)			

受 付

(係長) 大森 雅之
(美並小)

		来賓・講師 関小社役員	県内一般		他 県	控室案内	水戸市内 担当	
ホテル レイク ビュー 水戸		池田 恭 (松前台小)	会沢 裕之 (高野小)	下田 悟 (守谷小)	駒木 浩二 (郷州小)	小林 直也 (大井沢小)	田口 周一 (三の丸小)	
			飯島 哲 (黒内小)	倉持久美子 (御所ヶ丘小)	倉持 淳 (松ヶ丘小)			
		奥村 忠 (小田小)	小田倉篤司 (真瀬小)	笹目 敏久 (高崎中)	渡辺 義昇 (大曾根小)	山口のぞみ (竹園東小)	中根 紀子 (五軒小)	
	仲田 浩美 (作岡小)		中原 幸子 (前野小)	野部 博臣 (竹園西小)				
	中央	海老澤順子 (長岡小)	川上 直美 (川根小)	益子ひかり (石塚小)	竹内 貞夫 (依上小)		川崎 真里 (新荘小)	
			小松崎朱実 (七会小)	菅谷由美子 (磯浜小)	後藤 道雄 (上小川小)			
浜田小		仲谷 一洋 (新治小)		齊藤 幸一 (美並小)		加固 裕子 (牛渡小)		安孫子昌子 (稲荷二小)
常磐小		山口 和行 (安飾小)		工藤 和彦 (志士庫小)		萩原 雅之 (下稲吉東小)		塩谷 敬子 (渡里小)
緑岡小		福島 真 (七会小)		川井 均 (下稲吉小)		菅原 博 (志筑小)		市村 俊英 (吉田小)

接 待

中島 光一
(新利根中)

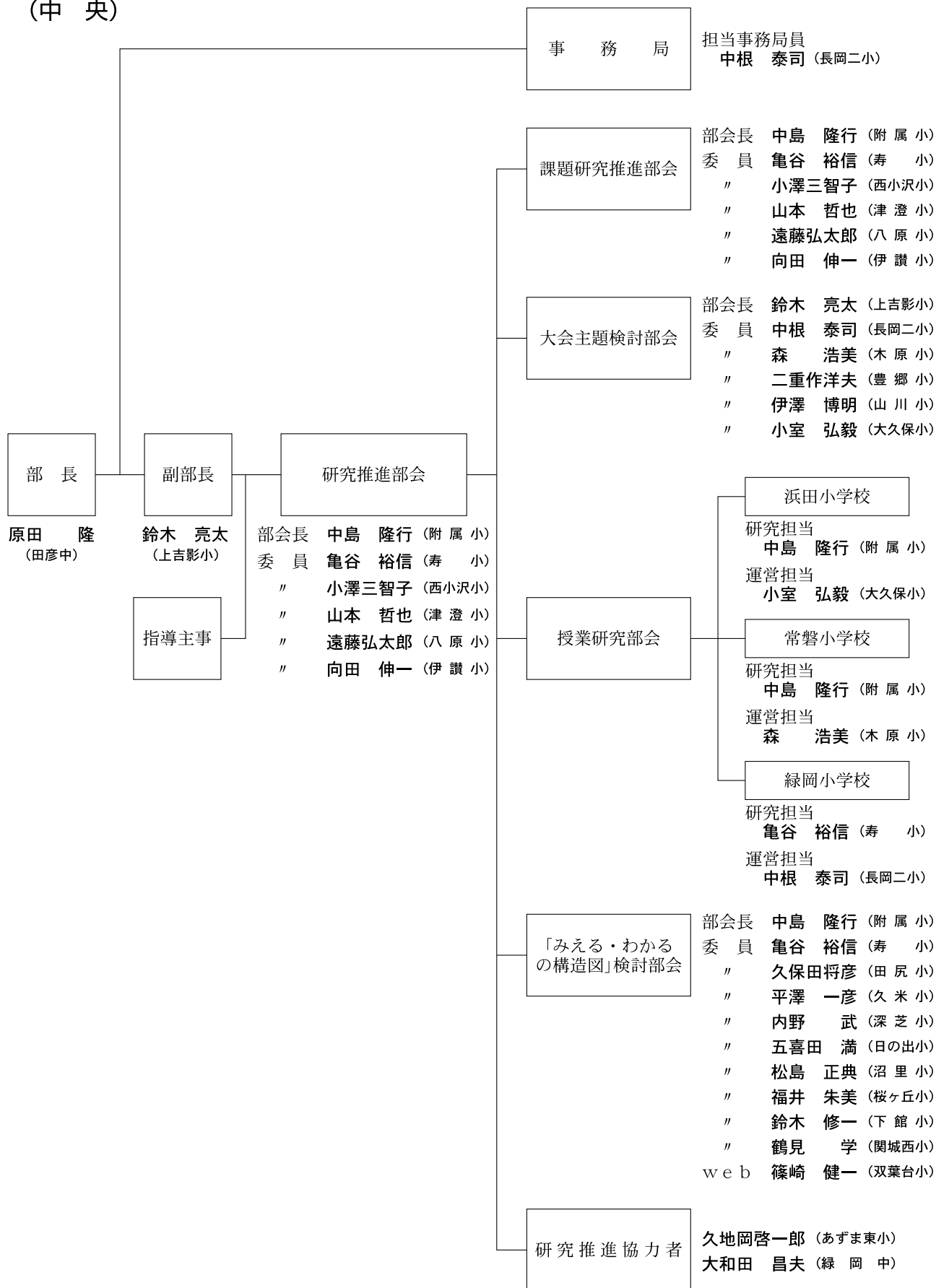
	来賓・講師	係員・提案者	市内校長・ 郡市部長・役員	水戸市内担当
ホテル レイク ビュー水戸	荻沼 恵美 (木原小)	宮本 智雄 (阿見一小)	飯塚 孝則 (生板小)	小林 主税 (酒門小)
	飯塚 敏 (大谷小)	原井 寿枝 (阿見小)	大谷 次男 (源清田小)	
	前田 淳子 (世喜小)	三川 徹 (本郷小)		
浜田小	生田目百合子 (神谷小)	早乙女雅代 (牛久小)	中野 理絵 (中根小)	益子 悦子 (千波小)
	鈴木 理恵 (大宮北小)	板谷 美穂 (岡田小)	伊藤 勇二 (向台小)	
常磐小	穴澤 貴史 (桜川中)	松島 正典 (沼里小)	足立 操 (あずま東小)	大沼 礼 (石川小)
	鈴木かをる (山方小)	星 充 (あずま南小)	藤井 裕行 (新東小)	
緑岡小	石山 貴司 (柴崎小)	湯原 明 (あずま西小)	川島 伸介 (高田小)	小松崎新一 (上中妻小)
	大森 成人 (山方南小)	長谷川幸典 (浮島小)	本橋 孝夫 (君賀小)	

部 長
川村美弥子
(牛久南中)

副部長
栗山 賢司
(木原小)

研究部

(中央)



会 場 部

(県 東)

事務局

担当事務局員 二重作 洋夫 (豊郷小)

案 内

(係長) 竹内 芳文
(新宮小)

駅からレイクビューへの案内・ バスへの誘導・案内Ⅰ ※活動場所ーレイクビュー周辺 各会場校			バスへの誘導・案内Ⅱ ※活動場所ー各会場校	
レイクビュー →浜田小	レイクビュー →常磐小	レイクビュー →緑岡小	浜田小→ レイクビュー	常磐小→ レイクビュー
江橋 宏明 (上島東小)	人見 八朗 (白鳥東小)	窪谷 彰子 (新宮小)	大場 俊彦 (串挽小)	沼田 真貴 (旭西小)
米川 賀久 (上島西小)	関根 康裕 (舟木小)	山崎 雅代 (鉾小)	沼田 和子 (旭東小)	菅谷 俊彦 (旭南小)
バスへの 誘導・案内 ※活動場所 ー各会場校		案内表示・ 係員駐車券 作成		
緑岡小→ レイクビュー		駅から レイクビュー への案内		
中央		仁平由美子 (照沼小)		
		飯塚 弘美 (大和田小)		
		廣瀬 恵 (中丸小)		
		◎羽鳥公寿 (青柳小)		

会 場

(係長) 根本 昌浩
(津知小)

ホテルレイクビュー水戸		浜田小	常磐小	緑岡小
大盛 法子 (麻生小)	郡司 賢一 (現原小)	高岡 成郎 (太田小)	駒館 憲治 (小高小)	五喜田 満 (日の出小)
小路口広樹 (大和一小)	千ヶ崎周子 (玉川小)	近藤 由美 (玉造小)	西村 嘉人 (大和二小)	門井 宜道 (牛堀小)
森内 浩司 (津澄小)	田中 康之 (小貫小)	飯島英梨子 (大生原小)	栗原 真紀 (武田小)	幡谷 和彦 (行方小)
◎斉藤 薫 (要小)	猪俣 克成 (潮来小)	梶山 恵子 (徳島小)	中島 章 (手賀小)	山口 洋子 (羽生小)
中央	田原 康司 (橘小)	加藤 明 (玉里小)	中崎 恵幸 (箱田小)	中山 成男 (友部小)
水戸市内 担 当	浅野 和久 (河和田小)	藺部 悠 (見川小)	豊田 和紀 (飯富小)	郡司 浩行 (飯富小)
レイクビュー水戸全体会別室担当				
水戸 市内 担当	石井 了 (吉沢小)	金子 直美 (下大野小)	平戸 好 (稲荷一小)	菊本 健太 (赤塚小)
		佐竹 尚子 (上大野小)	蛭町 郷 (国田小)	高村 洋一 (鯉淵小)
		千葉 稔哲 (柳河小)	秋山 正孝 (内原小)	生田目みつ子 (妻里小)

駐 車 場

(係長) 米川 仁
(波崎東小)

※◎は副係長

ホテルレイク ビュー水戸	浜田小	常磐小	緑岡小	消防跡地
河野 亮太 (波野小)	小出 哲史 (高松小)	◎太田雄介 (鹿島小)	鎌田 伸幸 (三笠小)	大崎 弘之 (豊郷小)
小林 浩子 (大同東小)				鈴木 和彦 (中野東小)
矢島幸太郎 (平井小)	長塚 健一 (豊津小)	西山真由美 (中野西小)	鶴岡智恵子 (大同西小)	生井沢敦子 (鉢形小)
				内野 武 (深芝小)
				渡辺 直紀 (波崎東小)

部 長

横田 英一
(平井小)

副部長

海老澤克美
(玉造小)

庶務部

(県北)

事務局 担当事務局員 小室 弘毅 (大久保小)

山崎 慎哉
(華川中)

資料
昼食
宿泊

	来賓・講師 ・役員	校長	浜田小	常磐小	緑岡小
			柴田 聡 (松岡小)	沼田 麗子 (東小)	田尻 裕子 (関南小)
中央	金澤 正彦 (菅谷東小)	寺門 千勝 (五台小)			

〈資料係長〉関根 恵子 (石岡小)

配付資料準備：(研究紀要・指導案・知識の構造図・郷土資料を受付へ)

〈昼食係長〉長谷川 清 (秋山小)

昼食数把握と発注・昼食券作成・全体会会場にて昼食配布

〈宿泊係長〉石塚美枝子 (富士ヶ丘小)

宿泊者数把握・ホテル確保・ホテル案内図作成

部 長

栗原 裕
(幸久小)

副部長

花園 浩
(秋山小)

写真記録

	ホテルレイク ビュー水戸	浜田小	常磐小	緑岡小
	後藤 伸司 (佐都小)	伊藤 達哉 (山田小)	曾根 勉 (世矢小)	磯野 秀一 (郡戸小)
	飯田 隆之 (河内小)	檜山 徹 (小里小)	野田 良直 (金砂郷小)	富永 雅代 (機初小)

〈係 長〉黒羽 富子 (幸久小)

写真撮影・アンケート用紙の作成準備・アンケート回収・
アンケートのまとめ

綿引 逸雄
(十王中)

懇親会

司会・企画	本田 正純 (久慈小)	黒澤 剛史 (諏訪小)	大谷 敬司 (櫛形小)
受 付	木村 光輝 (大沼小)	根本 宜之 (油縄子小)	柏原 和彦 (滑川小)
案内・接待	小澤 将憲 (水木小)	正木 直美 (宮田小)	川崎 正信 (豊浦小)

〈係 長〉及川 謙治 (平沢中)

分科会担当者

会 場		浜 田 小 学 校		常 磐 小 学 校		緑 岡 小 学 校				
責任者			◎県北副部長 桑原 裕		◎県東副部長 横田 英一		◎県南副部長 川村 美弥子			
世話役		3年	世喜小 池田 晃一		駒場小 中村 敬治		絹西小 幕田 喜一郎			
		4年	小田小 古宇田 正人		新宮小 竹内 芳文		箱田小 羽石 喜昇			
		5年	秋山小 花園 浩		十王中 綿引 逸雄		城西中 高田 和信			
		6年	黒沢小 麻生 弘		三島小 福田 正雄		橘 小 藤田 恵弘			
進 行			高浜小 立石 義孝		吉生小 高橋 勝美		府中小 小林 洋子			
学年別授 業研究会	授業者	3年	江原 輝子		奥川 芳子		田崎 友紀			
		4年	田村 雅子		宮田 直実		川村 潤子			
		5年	桑原 和彦		山口 恵子		近藤 理恵子			
		6年	三浦 広興		平山 智己		川崎 武信			
	司会	3年	中央 大賀小 大津 香	中央 石崎小 瀬谷 誠		県西 上山川小 竹澤 正雄				
		4年	県南 大宮小 宮本 一利	県東 大和三小 宮内 康夫		中央 宍戸小 中山 光一				
		5年	県北 中郷第一 塩野 淳子	県北 明德小 花園 隆一		県南 城西中 後藤 亮二				
		6年	中央 前渡小 嶋崎 光男	県南 阿波小 木村 寿		中央 堅倉小 金子 和広				
	記録	3年	古河四小 生沼 芳弘		生子菅小 関根 賢一		大田小 渡辺 孝弥			
		4年	小堤小 谷畑 威至		長須小 茂呂 大樹		関城東小 飯島 章夫			
		5年	仁連小 杉山 史康		弓馬田小 笹田 秀夫		村田小 島田 和宏			
		6年	下辺見小 坪山 昌則		七重小 鶴見 卓彦		五所小 深見 喜弘			
	学年別課 題研究会	文書発表者	3年	栃木	柏瀬 順一	神奈川		樋渡 由希恵	県西 伊讃小 向田 伸一	
			4年	埼玉	内山 達也	県東 大野原小 飯田 直樹		群馬		加部 善基
			5年	県北 台原中 杉澤 季展	東京 佐藤 真至・北中 啓勝		県南 八原小 遠藤 弘太郎			
			6年	中央 外野小 松本 恵	県南 古渡小 駒澤 悦郎		千葉		工藤 和子	
助言者		3年	栃木	柏瀬 和彦	神奈川		藤馬 享	県西教育事務所 森田 泰司		
		4年	埼玉	清水 健治	水戸教育事務所 勝村 登		群馬		高橋 通泰	
		5年	日立市教委	高橋 重樹	東京		小林 巧	水戸市総研 折本 正巳		
		6年	ひたちなか市教委 関口 拓生	石岡市教委		會田 照行	千葉	川嶋 知道		
司会		3年	栃木	池山 勝幸	神奈川		寺岡 徹	県西 江川南小 宮川 勉		
		4年	埼玉	山田 浩一	県東 巴第一小 岩城 和久		群馬		山田 一彦	
		5年	県北 山田小 和田 秀彦	東京		嶋田 英樹	県南 江戸崎中 小岩 泰規			
		6年	中央 前渡小 嶋崎 光男	県南 あずま南小 星 充		千葉		奈良 敬信		
記録		3年	栃木	増田 香代子	神奈川		宮野 憲一郎	県西 諸川小 木村 成雄		
		4年	埼玉	北川 智之	県東 玉造西小 飯田 浩彦		群馬		豊田 武司	
		5年	県北 君田小 富山 明子	東京		櫻井 正義	県南 山ノ荘小 渡邊 美智子			
		6年	中央 湊二小 押野 恭子	県南 沼里小 松島 正典		千葉		村瀬 正		

あ と が き

関東各都県そして遠くは岡山県から多くの先生方が、「弘道館と偕楽園の世界遺産登録を目指す水戸市」にお集まりいただき、第16回関東地区小学校社会科研究協議会研究大会茨城大会を開催することができました。

しかし、昨年(2011)年の3月11日に起きた東日本大震災で、茨城県も被災地となり、開催日、全体会会場を変更しての開催となり、大変ご迷惑をお掛けいたしました。

本大会では、『「かかわり」を大切にして、「みえる」「わかる」子どもが育つ社会科学習の創造』を主題に「思考力・判断力・表現力を連続させながら活用し、学習している子どもの姿」の実現をめざして研究を重ねて参りました。本年度は、小学校において新教育課程で新たなスタートを切った年であり、学びの新たなキーワードは、「習得」「活用」さらに「言語力」「表現力」等が挙げられています。

本大会を通して、茨城県から、ご参会の先生方に、今回の学習指導要領改訂に趣旨に沿った今後の社会科教育のあり方に何らかの視座を掴んでいただくことが出来たでしょうか。

わたしたちも、21世紀を担う茨城県の子どもたちのために、大会参加者の皆様方のご指導やご提案の成果を糧として、今後の社会科教育のより一層の充実のために精一杯努力をして参りたいと考えております。

大会当日は、700名を超える参加者があり、午前中には、安野功先生から、演題「関小社茨城大会の意義とこれからの社会科教育」として、ご講演をいただき、社会科の今後進むべき方向などを知ることができ、大変勉強になりました。また午後からは、各校で、大変熱心な授業参観、研究協議そして文書発表、討議がなされました。特に、授業においては、どの教室でも、子どもたちは、真剣に友だち、先生の話聞き、自分の考えを根拠をもって発言していました。参観者は、それを聞き取ろうと身を乗り出したり、背伸びしたりしている姿が見受けられました。どの授業も、子ども一人一人にとって、「自分ごと」としての学びが成立していたのではないかと自負しております。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり、県内外からご出席いただきました多数の先生方に感謝申し上げますとともに、國學院大學教授の安野功先生をはじめ、会場校の水戸市立浜田小学校・水戸市立常磐小学校・水戸市立緑岡小学校、並びに本大会にご支援・ご協力をいただきました全国小学校社会科研究協議会、茨城県教育委員会、茨城県校長会、茨城県教育会、茨城県教育研究会、水戸市、水戸市教育委員会、水戸市校長会、水戸市教育会、(財)茨城県教育弘済会など関係各機関の方々に対して、心から感謝申し上げます。

平成24年3月吉日

第16回関東地区小学校社会科研究協議会研究大会茨城大会
実行委員会 事務局長 鈴木 亮太

第 16 回 関東地区小学校社会科研究協議会研究大会 茨城大会報告

平成 24 年 3 月 31 日 発行

発 行 者 茨城大会実行委員長 北澤 正

事 務 局 小美玉市立上吉影小学校 鈴木 亮太
〒 311-3404 茨城県小美玉市飯前 1 3 7 6 - 1 6
TEL 0299-53-0050 FAX 0299-53-0574

印 刷 所 本社経営管理部 朝日印刷株式会社筑波工場
〒 300-4425 茨城県桜川市真壁町細芝 1 9 4
TEL 0296-20-7303 FAX 0296-55-4227

